

卒業論文

ヒロシマ・フクシマはどのように表象されたか
～新聞におけるカタカナ表記を中心に～

指導教官 高橋恭子

早稲田大学政治経済学部政治学科
映像ジャーナリズム・高橋恭子ゼミ

4年 前場理恵子

目次

序章

1. 溢れている、被災地のカタカナ表象
一人はどのようにそれを使い、受けとっているのか
2. 本論文の目的

第1章 カタカナの使用基準やカタカナ表記の現状

- 1-1 日本語に関する先行研究検証
- 1-2 新たな使用基準の仮説－「ヒバクシャ」を例に

第2章 「ヒロシマ」表象誕生の経緯と内包する意味

- 2-1 先行研究検索「ヒロシマ」表象の経緯
- 2-2 先行研究検索「ヒロシマ」は何を意味するのか
- 2-3 「ヒロシマ」表象の問題点

第3章 「フクシマ」表象誕生の経緯と内包する意味

- 3-1 先行研究検索「フクシマ」表象の経緯
- 3-2 先行研究検索「フクシマ」は何を意味するのか
- 3-1 「フクシマ」表象の問題点

第4章 新聞上における「ヒロシマ」「フクシマ」分析

- 4-1 調査対象・分析方法について
- 4-2 朝日新聞における「ヒロシマ」

4-3 朝日新聞における「フクシマ」

4-4 河北新報における「フクシマ」

4-5 分析結果および改善点

第5章 考察

5-1 カタカナの使用基準に対する仮説の検証

5-2 仮説「『フクシマ』は『ヒロシマ』のステレオタイプを踏襲した表象」の検証

終章－「フクシマ」のこれからはどうあるべきか、報道はどのように伝えるべきか

参考文献・引用一覧(項目別)

付録資料－アマゾン・カテゴリー「本」検索結果

序章

1. 溢れている、被災地のカタカナ表象

一人はどのようにそれを使い、受けとっているのかー

東日本大震災における福島第一原発事故発生以来、メディアや書籍においてタイトルや本文中に「フクシマ」というカタカナ表記を頻繁に目にするようになった。カタカナで表示することで国際社会へのメッセージ性を帯びさせる、という説明が世間に受け入れられているようだが、私はその説明に違和感を覚える。そもそもカタカナは、漢字を簡略化するために漢字の字体の一部を崩したものである。カタカナは、主に外国から入ってきたもの(外来語)を日本語に変換するための言語ツールとして使用されてきた。日本から世界に向けてメッセージを発信するためにカタカナ表記される、という説明が通例のようであるが、本来のカタカナ使用の規定に外れているのではないかと違和感を覚える。国際的に通用させたいならば、有効的にメッセージを届けたいければ、カタカナではなくアルファベットを用いるのではないだろうか。あえてカタカナを用いた表象を用い、そこに何らかのメッセージを込める意図があるとすれば、世界に向けたものではなく日本国内に向けてではないのか、と思わざるを得ない。

ところで、どの程度「フクシマ」が使用されているかについて、書籍をネット販売している Amazon で取り扱っている書籍をもとに調査した(2016.12.10 時点)^[1]。図書館検索とは異なり出版物のすべてを網羅できないが、カテゴリ「本」で「フクシマ」を検索した結果、タイトルあるいはサブタイトルに「フクシマ」を使用する書籍は 62 件ヒットした。

被災地としてとらえたものや、原発事故そのものを表したものの、東日本大震災以降から福島をフクシマとしたものなど、「フクシマ」の捉え方、使われ方は様々であり、一例として次に挙げる通りである。

『フクシマと沖縄―「国策の被害者」生み出す構造を問う』『フクシマ・沖縄・四日市―差別と棄民の構造』のように福島第一原発事故を天災ではなく人災としてとらえ、沖縄や四日市と同様に扱ったものや、『1984 フクシマに生まれて』『フクシマ原発の失敗 ― 事故対応過程の検証とこれからの安全規制』のように東日本大震災以降とそれ以前を区別し福島をフクシマと表記したもの、また、『脱原発、年輪は冴えていま―フクシマ後の原発現地』『フクシマのあとさき―複眼的エネルギー論』『フクシマの後で: 破局・技術・民主主義』『フクシマ以後 エネルギー・通貨・主権』のように福島第一原発事故自体を指すものがある。以上 61 件に関しては付録資料において列挙する。

[1] アマゾン, カテゴリ「本」 <http://www.amazon.co.jp>, 最終アクセス日 2015.12.10

そのうち、タイトルあるいはサブタイトルにおいて「フクシマ」と「ヒロシマ」か「ナガサキ」、あるいは「ヒロシマ」「ナガサキ」の両者とセットで扱っている書籍は 17 件あった。例えば、『ヒロシマが泣いている フクシマが泣いている』『世界史の中のフクシマ---ナガサキから世界へ』『ヒロシマ・ナガサキからフクシマへ 「核」時代を考える』『戦争と核と詩歌---ヒロシマ・ナガサキ・フクシマそしてヤスクニ』『メッセージ&フォトブック No Nukes ヒロシマ ナガサキ フクシマ』がある。

この『メッセージ&フォトブック No Nukes ヒロシマ ナガサキ フクシマ』において、作家の重松清は「カタカナの街」と題して、核の犠牲者である故に核廃絶の使命を背負う運命を強いられた街々に思いを馳せ「たまらなく悲しいこと」^[2]と表現した。そのうえで、「カタカナ表記されたその街の記憶を、そこに込められた無念や希望」^[3]を未来の世に渡す使命を確認した。広島や長崎がメッセージ性を帯びた表記をされることについて、重松は「カタカナで表記される時、もしくはローマ字表記の HIROSHIMA と NAGASAKI で綴られるとき、二つの街は国境を超え、人類史のスケールでの歴史を背負う」^[4]とした。そして、フクシマという、新しい“カタカナの街”が増えてしまったことを「おとなの一人として、いまの子どもたちと未来の子どもたちに詫びたい」^[5]という思いを伝えていた。

一方、広島の教育現場の講話の中にも、子どもたちに対し「フクシマ」を「ヒロシマ」と結びつけて伝えているものがある。以下に引用する。

広島は、カタカナで「ヒロシマ」と書かれることがあります。人類史上初めて核爆弾が炸裂し、廃墟となった町「ヒロシマ」。それを象徴的にカタカナで表しています。そして今、福島県は「フクシマ」とカタカナで表記されるようになっていきます。一発の原子爆弾で廃墟と化した町「ヒロシマ」と同じく、福島第1原発の事故以来、放射能に汚染された県として、「フクシマ」とカタカナで表記されるのです。(中略) 私たちは、「ヒロシマ」に生きる者として、「核兵器」についてははっきりと「ノー」と言えます。しかし、原子力発電所をはじめとする核エネルギーについて、はっきりと「ノー」と言えるでしょうか。人類の発

[2] 重松清他共著(2015)『メッセージ&フォトブック No Nukes ヒロシマ ナガサキ フクシマ』講談社

P39 上段 L16

[3] 同上, P39 下段 L15-16

[4] 同上, P39 上段 L5-8

[5] 同上, P39 下段 L3-4

展を支えるエネルギーとして、核エネルギーはどうしても必要だと言われた時に、それでも、「ノー」と言えるでしょうか。私は、それでも「ノー」と言わなければならないと思っています。考え方は色々あるでしょう。^[6]

これらの例からも推測できるように、「フクシマ」を「ヒロシマ」や「ナガサキ」と関連付けて、あるいは同一視する見方は、とりわけ東日本大震災以降、核兵器のみならずエネルギーとしての「原子力」を総括的に捉えようとする世論の特徴として見られる傾向であるようだ。

2. 本論文の目的

本論文では被災地に対するカタカナ表記の背景や傾向、現状を調査することによって問題点を検証し、蔓延する“ヒロシマ”“フクシマ”に提言を試みるのであって、個々にそれらを使用する意図や使い方を否定することを目的としていない。

本論文の目的を果たすため、カタカナで表記された「人口に膾炙した固有名詞」^[7]の分析にかかる準備段階として、まずは言語自体の観点から、カタカナ表記の使用基準や問題点を先行研究から検証したい。

つぎに、「ヒロシマ」あるいは「フクシマ」というカタカナ表記に関して寄せられた専門家たちの先行研究を検証する。具体的には、それらがカタカナで表象されるようになった経緯や、実際にカタカナで表象される時その使用者がどんな意図をもって使用しているのかについて、先行研究として学術論文や文献から紐解いていきたいと思う。

さらに、世論の形成に深くかかわり、国家の方針に多大な影響を与える「メディア」を対象に調査分析を試みる。メディアにおいて、どの程度「ヒロシマ」や「フクシマ」といったカタカナ表記が登場しているのか、その中でも、その情報の発信者の意図によって「放射能」に対するメッセージを内包したカタカナ表記はどのくらい存在するのか、について対象とするメディアのデータを使用意図によって仕分けし、分析する。

[6] 広島学院中学校・高等学校ウェブページ「講和」「9月10日朝礼『ヒロシマ』そして『フクシマ』」2012/09/10」http://www.hiroshimagakuin.ed.jp/kowa/kowa_201209101, 最終アクセス日 2015 年 12 月 16 日

[7] 柴田優呼(2015)『“ヒロシマ・ナガサキ”被爆神話を解体する』,作品社, P229L15

本論文が目指すことは、“被災した地域の漢字をカタカナに変換して表象された固有名詞”に向けられた数多くの、散りばめられた思いや見解をまとめる作業を進めることにより、それらの語に課せられた使命や語句の使い方に見られる差異や歪みを確認することである。また、メッセージ性を帯びた固有名詞の扱いについて、メディアを対象に分析することで現状を把握するとともに、メディアが人々に与える影響を考慮したうえで、発信者側が適切に「ヒロシマ」「フクシマ」を使用したり、受け手側が意味を解釈したりするための提言を試みたいと考えている。

第1章 カタカナの使用基準やカタカナ表記の現状

1-1 日本語に関する先行研究検証

日本語の語種に関する先行研究から、カタカナの使用基準やカタカナ表記の現状を探りたいと思う。

普段目にするカタカナ表記の日本語は外来語と非外来語に区別することができる。カタカナで表記するのは外国から入ってきたもの、音や状態を表す擬声語や擬態語であると 15 年ほど前に小学校の国語科で教わったが、現在では非外来語や会話にカタカナを使用する機会が増加し、それまで和語や漢語で表してきたものを昨今ではカタカナで表記するのが珍しくなくなってきた。

このような「非外来語」に対する先行研究については、村中淑子と黎 婉珊(2013)の「中上級日本語教科書における非外来語のカタカナ表記の実態」を利用する。その中で列挙された、土屋信一 (1977)以降の「非外来語の先行研究」の流れをもとにカタカナ使用例の変化について研究している成田徹男・榊原浩之 (2004)の「現代日本語の表記体系と表記戦略ーカタカナの使い方の変化ー」^[8]を参考に検討する。

成田と榊原(2004)が想定した「日本語の表記原則」^[9]の規則によると「規則 1: 漢語は『漢字』で書け」「規則 2: 和語は『漢字』または『ひらがな』または『両者の交ぜ書き』で書け」「規則 3: 外来語は「カタカナ」で書け」「不随規則: 漢字制限により漢字で書けないときは、その部分を、またはその語全体を、ひらがなで書け」である。にもかかわらず、実際のところ上記の規則に当てはまらない使用例が多く見られる。

[8][9]成田徹男・榊原浩之(2004), 人間文化研究 2, 41-55, 2004-01-10 名古屋市立大学「現代日本語の表記体系と表記戦略: カタカナの使い方の変化」, <http://ci.nii.ac.jp/els/110004047607> 最終アクセス日 2016.1.18

その代表が非外来語に対するカタカナ表記である。一般紙とスポーツ紙を扱う新聞社のウェブページから収集したテキストを調査して得た「カタカナ表記例リスト」のうち、「〈固有名〉－〈地名〉」は以下の通りである。

カミオカンデ、キトラ古墳、ジュニアススキノ、ススキノ、トウキョウ・リッパー、ナガサキ、ナゴヤ、ナゴヤドーム、ニッポン、ヒメジ、ヒロシマ、ミナミ、ヨコハマ、ヨコハマスカイ店、ロッポンギ、旭ヶ丘中、宇ノ気、霞ヶ浦、鎌ヶ谷市、茅ヶ崎、駒ヶ根、江ノ島、鴻ノ巣、中ノ岳、天城湯ヶ島町、二ツ井町、二ツ塚小、梅ヶ島、美ヶ原、弥生ヶ丘、柳ヶ浦、柳ヶ瀬、竜ヶ崎、竜ヶ崎一、六ヶ所村、燧ヶ岳、賤ヶ岳^[10]

上記リストの中に「ナガサキ」「ヒロシマ」があった。この論文は2004年に書かれたため当然「フクシマ」は見当たらない。『英語は地球語』ということばに象徴される、国際化、グローバル化という流れを良しとする風潮^[11]によって「カタカナで表記されることは、新しさ、国際性、というイメージに結びつく」^[12]としている。そのため、「地名が『ニッポン』『ヒロシマ』『ヨコハマ』とカタカナ表記されるのは、外国から見た日本、世界の中の位置というものを意識した文脈においてであろう」^[13]と分析する。

ただ、リストを見ると、「ススキノ」「ナゴヤ」「ミナミ」のように“世界に向けてのメッセージ”の意味合いを内包しないカタカナ表記が連なっているため、カタカナ表記された地名のすべてがその分析に従っているとは言い難い。村中と黎(2013)は論文の先行研究において「中山恵利子(1998)は日本の地名をカタカナにする場合は、一見外国のものであるかのようなモダンなイメージを持たせている」^[14]としている。「国際性」と「モダン」のどちらにしても、カタカナ表記に込めた使用者の意図や思惑が影響しているのではないだろうか。

成田と榊原(2004)は「カタカナの持つ機能」にも注目している。そのひとつに「漢字やひ

[10][11][12][13] 成田徹男・榊原浩之(2004), 人間文化研究 2, 41-55, 2004-01-10 名古屋市立大学「現代日本語の表記体系と表記戦略：カタカナの使い方の変化」, <http://ci.nii.ac.jp/els/110004047607> 最終アクセス日 2016.1.18

[14] 村中 淑子・黎 婉珊(2013), 国際文化論集 (48), 113-134, 2013-08-30 桃山学院大学, 「中上級日本語教科書における非外来語のカタカナ表記の実態」, 本文中引用箇所－参考文献, 中山恵利子(1998) 「非外来語の片仮名表記」『日本語教育』96 日本語教育学会, <http://ci.nii.ac.jp/naid/110009892620> , 最終アクセス日 2016.1.18

らがなで表記されないことによって『普通の意味用法とは違うことを示す』という機能^[15]である。あえてカタカナ表記をすることで、新たな印象あるいは従来とは異なった意味を創造することができるのである。

成田と榊原(2004)と同様に、奥垣内健(2010)は以下のようにカタカナ表記語を同音異義語的位置づけを試みる。

カタカナ表記語が単に音を表すだけのものや、漢字表記語の単なる多義や異表記ではなく、独自の意味を持つ一種の同音異義語であると考えることが妥当である^[16]

1-2 新たな使用基準の仮説－「ヒバクシャ」を例に

成田・榊原(2004)が「漢語を、カタカナで書く」リストに入れた日本語の中に、「ヒバクシャ」があった。原水爆の被害を受けた者“被爆者”や原発事故等により放射能を身体に浴びた者“被ばく者(被曝者と表すこともある)”を「ヒバクシャ」と表象した経緯については、小菅信子(2014)は以下のように説明を加えている。

「被爆者をヒバクシャと表記することもあるのは、大気圏内核実験がさかんに行われていた時代に、死の灰による放射能汚染に苦しめられた中部・南太平洋地域などの住民たちの母語に、あるいはこの問題に関心を抱いた海外諸国の言語に、被爆者をあらわす適切な言葉がなかったからとされる」^[17]

さて、「ヒバクシャ」が初めて登場したのは、1977年に国連 NGO 主催のもと開催された「原爆被害とその後遺および被爆者の実情に関する国際シンポジウム」においてである。「ヒバクシャ」が世界共通語になったきっかけについて、日本原水爆被害者協議会はウェブページの中で下記の通り報告している。

[15]成田徹男・榊原浩之(2004), 人間文化研究 2, 41-55, 2004-01-10 名古屋市立大学「現代日本語の表記体系と表記戦略：カタカナの使い方の変化」, <http://ci.nii.ac.jp/els/110004047607> 最終アクセス日 2016.1.18

[16] 奥垣内健(2010), 京都大学言語科学論集 = Papers in linguistic science (2010), 16: 79-92「カタカナ表記語の意味についての一考察：身体性とイメージの観点から」<http://hdl.handle.net/2433/141357> 最終アクセス日 2016.1.15

[17] 小菅信子(2014)『放射能とナショナリズム』, 彩流社, P4L7-10

NGO 国際シンポジウム宣言「生か忘却か ヒロシマ・ナガサキのヒバクシャから全世界のヒバクシャに訴える」がノエル＝ベーカー卿によって読み上げられた。シンポジウムを通して「ヒバクシャ」という言葉が多く語られたが、「宣言」にはヒバクシャが HIBAKUSHA と記され、これ以後「ヒバクシャ」は世界共通語として使われるようになる。^[18]

以上のように、日本語に関する先行研究からカタカナ表記を吟味すると、非外来語にカタカナを使うことは本来の「日本語の表記原則」の規定に沿ったものではなく、成田と榊原(2004)が想定した「日本語の表記戦略(仮説)」^{※1}が影響しているものと考えられる。

被害を受けた日本の地域名をカタカナで表象することについての「表記戦略」を挙げれば、日本語の表記戦略(仮説)の中では、6項目「音を明示したい、意味をきわだたせたい、などの表現意図があるときは、カタカナで書け」^[19]が当てはまる。

※1 日本語の表記戦略（仮説）^[20]

1. 明らかに外来語である語は、カタカナで書け。
2. 固有名は、決まった表記があればそれに従え。
3. 漢字で書ける語は、漢字で書け。
4. 動物、植物、オノマトペ・畳語は、カタカナで書いてもよい。
5. 漢字で書けるはずの語で、漢字がわからない、あるいは読みにくいと思われるときは、カタカナで書け（活用語尾はひらがなでよい）。
6. 音を明示したい、意味をきわだたせたい、などの表現意図があるときは、カタカナで書け。
7. 上記のいずれにもあてはまらない場合は、ひらがなで書け。

上記でふれたように「ヒバクシャ」が国際社会において HIBAKUSHA として使用されている例から推測すれば、もともとは日本のものが国際的用語として通用したものとして、成田と榊原(2004)の「日本語の表記戦略(仮説)」では説明できない“8項目の表記戦略”を

[18] 日本原水爆被害者団体協議会 HP, 「国際活動『第二章』」, http://www.ne.jp/asahi/hidankyo/niho_n/seek/seek1-01.html, 最終アクセス日 2016.1.22

[19][20] 成田徹男・榊原浩之(2004), 人間文化研究 2, 41-55, 2004-01-10 名古屋市立大学「現代日本語の表記体系と表記戦略：カタカナの使い方の変化」, <http://ci.nii.ac.jp/els/110004047607> 最終アクセス日 2016.1.18

仮説に加えなければならない。独自の見解として私が立てた仮説は「8：和語・漢語が国際社会で使用され“外来語的”性質を帯びた語は、カタカナで書け」である。

この仮説の検証は、以下の章において「ヒロシマ」、「フクシマ」を対象に、先行研究や新記事分析結果によって試みる。

第2章 「ヒロシマ」表象誕生の経緯と内包する意味

2-1 先行研究検索「ヒロシマ」表象の経緯

核爆弾を投下され被爆国となった日本から世界に向けて核廃絶のメッセージを伝えるとき、被害を受けた地域名をカタカナで表記して「ヒロシマ」「ナガサキ」と表象することが多い。柴田優呼(2015)は、著書『“ヒロシマ・ナガサキ”被爆神話を解体する』の中で、「ヒロシマ／ナガサキという呼びかた」^[21]が広まっていった経緯について、日本国外からの要因である可能性を示唆し、つぎのように言及している。

「英語では、アメリカの原爆使用また広島、長崎の原爆被害という出来事全体を、Hiroshima/Nagasaki、または Hiroshima と呼ぶのが一般的」^[22]であり、このことに関して影響を及ぼしたのは、アメリカ人のジャーナリストであるジョン・ハーシーが著した『ヒロシマ』かもしれない、と柴田(2015)は推測する。その理由として、広島に原子爆弾が投下されて以降1年余りで広島について書かれたルポ『ヒロシマ』は大反響を得て、ラジオで朗読されたり、出版されてベストセラーになったり、さらには十数か国語に翻訳されたりするなど世界からも注目を集めたために、『ヒロシマ』の内容も影響して“原爆投下やそれによる放射能被害を総称して Hiroshima と英語圏で表現するようになったこと”を挙げている。柴田(2015)は、『ヒロシマ』が元アメリカ大統領トルーマンの声明が創始した「爆発力に重きを置き、放射能の影響を無視する形で原爆を位置づける言説」^[23]を踏襲しているという見解から、「放射能の影響を軽視する点」^[24]に警鐘を鳴らしているが、少なからず広島の惨劇を世の中に広めた、ハーシーに関して以下のように説明している。

一九四六年春に広島を訪れ、被爆者を取材して書いたルポ『ヒロシマ』が同年夏、世界中でセンセーションを巻き起こし、一躍有名になったアメリカのジャーナリストがいた。その名はジ

[21] 柴田優呼(2015)『“ヒロシマ・ナガサキ”被爆神話を解体する』,作品社, P227L10

[22] 同上, P227L13-14

[23] 同上, P173L2-3

[24] 同上, P173L9

ョン・ハーシーである。^[25]

原作の発表から遅れること約三年、ようやく一九四九年四月にハーシーの『ヒロシマ』の和訳が日本でも出版された。^[26]

ハーシーの『ヒロシマ』は日本でも大きな注目を集めた。原爆文献の研究者、水田九八二郎によると、初版五万部はすぐ売り切れ、一九四九年ごろから盛んになったノンフィクションものの先駆けになったという。^[27]

広島や長崎で起こった出来事を英語では Hiroshima/Nagasaki、あるいは Hiroshima と表し、それを外国人の著者ハーシーが原稿のタイトルに用いたことによって日本でカタカナ表記されているとすれば、「ヒバクシャ」同様に国際社会から逆輸入された“外来語的”語ととらえることができる。あるいは、広島や長崎は“米国が投下した核爆弾”によって被爆地となったという解釈から、国内に向けてのメッセージとしてカタカナを使うとき、“外国からもたらされた”ことから“外来語扱い”されたと考えられる。その場合も、第1章1-2で私が導いた仮説「和語・漢語が国際社会で使用され“外来語的”性質を帯びた語は、カタカナで書け」を当てはめれば、“広島ではなくヒロシマ”“長崎ではなくナガサキ”というカタカナ使用を理解することができるのではないだろうか。

2-2 先行研究検索「ヒロシマ」は何を意味するのか

序章において取り上げた「カタカナの街」の中で重松(2015)は“核廃絶”を背負った「ヒロシマ」「ナガサキ」に思いを馳せ、次のように記した。

漢字で記された広島と長崎から、地名の意味や由来が剥ぎ取れ、音だけの言葉になることで、二つの街は一九四五年八月六日と九日の「体験」を超えて、さまざまな立場や世代の人びとに開かれる。核の悲劇を噛みしめ、核のない世界を構築するための合言葉になりうる。^[28]

[25] 柴田優呼(2015)『“ヒロシマ・ナガサキ”被爆神話を解体する』,作品社, P64L10-12

[26] 同上, P73L6-7

[27] 同上, P73L17-19

[28] 重松清他共著(2015)『メッセージ&フォトブック No Nukes ヒロシマ ナガサキ フクシマ』講談社
P39 上段 L9-14

地球上の生き物が自らの手で破滅しないための「合言葉」として、「ヒロシマ」をとらえる。一方、以下に引用するように、“罪のない人々に降りかかった悲劇”として記憶に留めておくための意味を「ヒロシマ」に持たせる見解もある。

現在も、ヒロシマは「無辜の死」の象徴として人びとの記憶の中にとどまる。そしてその記憶は、核に結びつく。一瞬の閃光と爆発音のもと黒いキノコ雲が空を覆い、その後放射能が街や人びとを覆い尽くす情景と、大量の熱線と放射能を浴びた人びとがまるで後を追うようにして次々と死界へと渡る姿は、ヒロシマと原子力による放射能とを否定なく結びつける。^[29]

他方、安藤裕子(2009)は「ヒロシマ」の流動性と多様性に注目している。

今日では、ヒロシマ・ナガサキという言葉が人々に想起させる記憶は随分と多様なものになった。依然として「アジア・太平洋戦争の被害と敗戦」、「核戦争による人類絶滅への警鐘」、「世界平和への願い」のシンボルとしての記憶が中心にあることに変わりはないが、その他にも「科学技術の暴走が人間に与えるしっぺ返し」、「被害者が更に差別されるという二重差別」、「加害者と被害者という単純な二元論の解体」、「国家や権力による情報の隠蔽」、「弱者やマイノリティへの暴力」といった現代社会の諸相を映し出す多くの課題が、ヒロシマ・ナガサキの表象の中に見え隠れしている^[30]。

安藤(2009)がこの論文を発表したのは東日本大震災の2年前である。「現代社会の諸相を映し出す多くの課題」を「ヒロシマ」に託されるならば、2011年3月に日本でもチェルノブイリの悪夢を経験したのちに、「ヒロシマ」は新たな課題とメッセージを内包したのではないだろうか。

[29] 野宮大志郎(2012)「ヒロシマ」から「フクシマ」への道:「ヌークリア(原子なるもの)」の意味変換, 上智大学, 紀要/Departmental Bulletin Paper, 西洋文学ならびに東西文化交流の研究, 59(4), 2012-02-15, http://repository.cc.sophia.ac.jp/dspace/bitstream/123456789/33902/2/200000010063_000480000_82.pdf, 最終アクセス日 2016.1.17

[30] 安藤裕子(2009), 「ヒロシマ・ナガサキはどのように表象されてきたか—公的記憶の変遷を辿る—」 早稲田大学大学院アジア太平洋研究科博士学位論文 <http://hdl.handle.net/2065/34955>, 最終アクセス日 2015.12.17

他にも「ヒロシマ」の多様性を指摘する見解がある。柴田(2015)は「ヒロシマ／ナガサキが実際に何を意味するかもあいまいである」^[31]としたうえで、「アメリカの原爆使用という戦争行為を指すのか、被爆者の体験を指すのかははっきりせず、そうした出来事をどう評価しているかもよくわからない。この言葉を使用する意図や文脈によって、何を指すかが変わるような種類の言葉」^[32]であると分析している。

2-3 「ヒロシマ」表象の問題点

指し示す意味を直接的な言葉で表象しないために、安藤(2009)や柴田(2015)の指摘にあるように、「ヒロシマ」は使用者や場面、その時代に起こった他の出来事によって意味を変化させることができる。「核廃絶」の象徴としての「ヒロシマ」が主流であるだろうが、それ故に、違った意味で使われている場合でも受け手は「核廃絶」のメッセージとしてとらえてしまう危険性がある。

また、地域名にカタカナで表象することの弊害として、柴田(2015)は、「地理的限定が、原爆被害の概念化にも現実に関係している」^[33]と指摘し、その事例として、フランスの哲学者ジャック・デリタが1984年に米国で発表した論文の中で“いまだかつて核戦争は起こっていない”という内容を発表したことを挙げた。デリタが「ヒロシマ」を地域(日本)に限定した出来事に封じ込めたように、「ヒロシマ」という表象がその解釈に誤解や歪みを生じさせることがあれば、それが一番の問題点である。

広島核爆弾による被爆を「ヒロシマ」と表象することは、9.11同時多発テロを「ニューヨーク」と表象するようなものである。もし、9.11同時多発テロに対する表象を、“テロによる無差別な殺戮やその被害自体”を意味するものではなく、発生した場所の名称のまま表象されたとしたら、ニューヨークに対して、その後の世界の反応は、あるいはニューヨーク市民の思いは、どうだったのであろうか。

その答えを探るために「ヒロシマ」と「ホロコースト」との違いを先行研究から探ることにする。

小菅(2014)はトム・エンゲルハートの『戦争と正義』の中から、以下のジョン・ダワーの指摘を引用している。

[31] 柴田優呼(2015)『“ヒロシマ・ナガサキ”被爆神話を解体する』,作品社, P228L7

[32] 同上, P228L7-10

[33] 同上, P228L12

原爆は、日本人にとって、「ユダヤ人にとってのホロコーストにたいへんよく似た特異な受難のシンボル」であり、多くの人びとはなお「ほとんど宗教的感覚で、自分達は起きてはならない世界の破滅という、未来の黙示録的光景を目撃するために選ばれたと思っている」^[34]

ジョン・ダワーの言うように原爆の恐ろしさを経験した広島や長崎の人びとが世界に向けての「核兵器廃絶」の使命感を持っていることは理解できる。ここで問題なのは地名がカタカナ表記され、地名とは別の意味を背負ったことにある。柴田(2015)は「ヒロシマ」を「ホロコースト」と対比させて以下のように分析している。

地域名という固有名詞で呼ぶことで、原子爆弾という兵器の存在が明示されなくなり、爆撃という戦闘行為も同時に隠されてしまう側面がある。大量殺戮または大量の死という事実も表立って見えなくなるのだ。ナチスの行ったユダヤ人やマイノリティの大量殺害が、大虐殺を意味する「ホロコースト」(the Holocaust)と呼びならわされているのとは対照的である。^[35]

柴田(2015)が指摘する“地域名に原爆投下といった、地域以外の意味を持たせることの弊害”は、「ホロコースト」のように“行為の直接的表現”を避けたことによって、「ヒロシマ」が「使用する意図や文脈によって、何を指すかが変わるような種類の言葉」^[36]になってしまったことに他ならない。

第3章 「フクシマ」表象誕生の経緯と内包する意味

3-1 先行研究検索「フクシマ」表象の経緯

「フクシマ」の経緯については、戦後70年の歴史の中で登場し定着してきた「ヒロシマ」「ナガサキ」「ヒバクシャ」と違い、原発事故発生から登場までの時間を考慮すれば経緯を分析すること自体意味のないことである。先行研究において、「フクシマ」の経緯に関するものとは出会えなかった。ただ、小菅(2014)は「フクシマ」のきっかけについて福島以外にもたらされたのではないかと、言及している。

[34] 小菅信子(2014)『放射能とナショナリズム』, 彩流社, P144L13-15

[35] 柴田優呼(2015)『“ヒロシマ・ナガサキ”被爆神話を解体する』, 作品社, P228L3-6

[36] 同上, P228L9

福島をフクシマと最初に表記し、そしてどのように拡散したのだろうか。すくなくとも、原発事故の被害を最初に、かつ最も深刻に受けた福島の人びとや同地の地方メディアが、福島をフクシマと表記しはじめたのではない。^[37]

フクシマという表記はいまだ他者による表象であって、福島自身による自己規定だとはいいいがたい。^[38]

この“他者による表象”について、元読売テレビアナウンサーの道浦俊彦(2013)は「新・ことば事情 5024『フクシマ』」の中で、自己の見解として、フクシマ表記に外電が影響している旨を示唆した。2011 年開催の新聞用語懇談会で出された「カタカナ表記での『フクシマ』には、『ヒロシマ』『ナガサキ』の原水爆禁止運動につなげようという意図が感じられる場合もあり、カタカナ表記は慎重にすべきではないか？」^[39]という意見を受けて、「カタカナ表記の『フクシマ』は、福島原発で勇敢に働く作業員たちを指して、外電が『フクシマ 50』と伝えているという、外電の意味合いであったのではないか？」^[40]と答えたいえで、反原爆を唱える運動とのつながりがある可能性を示唆した。

「フクシマ 50」がメディアに登場した経緯について、朝日新聞デジタルのコトバンクによれば以下の通りである。

福島第一原発では、東京電力のほか東芝や日立製作所など関係会社の社員たちが復旧作業を続けている。地震発生時には 700 人以上いたが、3 月 15 日の 2 号機の爆発で大勢が退避し、約 70 人で作業を続けた。残った人数は当初「50 人」と発表されたため、海外のメディアが「フクシマ・フィフティー」と報じ、広まった。^[41]

また、小林宏朗(2013)が『新聞で語られた東日本大震災における「フクシマ」と「ふくしま』』において発表した論文によれば、「フクシマ」が過去に起こった出来事ー「チェルノ

[37] 小菅信子(2014)『放射能とナショナリズム』, 彩流社, P4L1-3

[38] 同上, P7L10-11

[39][40] 読売テレビ HP, 道浦俊彦(2013), 「新・ことば事情 5024 「フクシマ」」 <http://www.ytv.co.jp/blog/announcers/michiura/2013/03/post-1598.html> 最終アクセス日 2016 年 1 月 17 日

[41] 朝日新聞デジタル, コトバンク, <https://kotobank.jp/dictionary/news/>, 最終アクセス日 2016 年 1 月 17 日

ブイリ」や「ヒロシマ」に影響を受けて負のイメージをまとったことがわかる。

「フクシマ」というカタカナ表記が、福島第一原子力発電所で
の事故を指すことは周知の事実だが、この表現を明確に定義し
ている先行研究は見当たらない。しかし、ある一定の共通見解
を見出すことはできる。たとえば民俗学者の赤坂憲雄は「傷つ
いた場所」(赤坂 2012: 38)や「チェルノブイリ、フクシマと
並べられる負のイメージ」(玄侑ほか 2013: 115)、「ヒロシマ・
ナガサキ・フクシマという、世界のフクシマ」(鷲田・赤坂 2012:
217)といったように、複数の著作でその負のイメージに言及
している。^[42]

3-2 先行研究検索「フクシマ」は何を意味するのか

「フクシマ」も「ヒロシマ」同様に、情報の送り手や筆者によって、その言葉が指す意味
は変わってくる。先行研究から様々な「フクシマ」を探る。

朝日新聞発行の『Journalism no.285』に「フクシマ」に託された意味についての記述が
ある。

「フクシマ」には「避難民の帰還」や「脱原発」といった意味
が内包される一方で、「原発再稼働」や「原発輸出」など、経済
価値と結びつく意味も組み込まれている。「オリンピック」によ
って経済成長の観点から「復興」が強く規定されるようになると、
「フクシマ」の「復興」もまた、そうした経済的な救済や、
それらを実現するための政策によって意味づけが行われ、解釈
される可能性が高くなる。^[43]

上記の記述によれば、フクシマは負の意味だけではないことがわかる。とはいえ、「フクシ
マ」を「原発事故」「脱原発」「放射能」と関連付けて解釈することが極めて多い。

前述の小菅(2014)は著書の中で以下のように指摘している。

[42] 小林宏朗(2013), 日本マス・コミュニケーション学会研究発表論文「新聞で語られた東日本大震災に
おける「フクシマ」と「ふくしま」」, [http://mass-ronbun.up.seesaa.net/image/2013fall_C4_Kobaya
shi.pdf](http://mass-ronbun.up.seesaa.net/image/2013fall_C4_Kobayashi.pdf), 最終アクセス日 2015.12.17

[43] 『Journalism 2014 年 2 月号(通巻 285 号)』, 朝日新聞出版, P121 上段 L22-27, 中段 L1-4

フクシマに関しては原発事故による放射能汚染のために、使用者の意図が明らかな場合は「国際連帯を期する反原発運動や即時廃墟運動の集合的意志の反映」と見てとれる^[44]

前述の小林(2013)も『新聞で語られた東日本大震災における「フクシマ」と「ふくしま」』において「フクシマ」の意味を以下のように示す。

「フクシマ」表記は総じて、原発事故だけでなく原子爆弾、さらにはアウシュビッツなどに関連付けられることで、世界規模で「いささか恐ろしい、あるいは過酷な名」(Nancy2012:4)として認識されている^[45]

3-3 「フクシマ」表象の問題点

3-1 で引用した小菅(2014)の見解を参考にすれば、「フクシマ」は福島的外部からもたらされた表象であって、福島の意図とは反している。小菅(2014)は「福島に暮らす人びとのなかには、『福島はフクシマじゃねえ』と、勝手にカタカナ書きにされることに反発を表明する人もいる」^[46]と言及している。

つづけて小菅(2014)は福島がカタカナ表記されることについての意図と問題点について、次のように指摘している。

フクシマというカタカナ表記に、今次の原発事故による被害の越境性、問題の国際的共有や反原発運動を促進するための国際連帯への期待をみてとれると同時に、現段階で、多かれ少なかれ、ある種の他者性や排他性が感じられることである。^[47]

福島県の一地域で起こった原発事故に対し、福島をフクシマと表記することによって福島県にもたらされる弊害のひとつに、「福島県産」の農作物や海産物に及ぼす風評被害を生み

[44] 小菅信子(2014)『放射能とナショナリズム』, 彩流社, P4L12-13

[45] 小林宏朗(2013), 日本マス・コミュニケーション学会研究発表論文「新聞で語られた東日本大震災における「フクシマ」と「ふくしま」」, http://mass-ronbun.up.seesaa.net/image/2013fall_C4_Kobayashi.pdf, 最終アクセス日 2015.12.17

[46] 小菅信子(2014)『放射能とナショナリズム』, 彩流社, P5L4-5

[47] 小菅信子(2014)『放射能とナショナリズム』, 彩流社, P4L14-16

出しているのは事実である。現に、福島第一原発事故について十分な理解もないままに、海外では「フクシマ」が誤った印象を与えている事例がある。フランスにおける風刺画問題である。2020 年東京五輪開催が決定した矢先にフランスの週刊紙カナール・アンシェネが放射能汚染で手や足が 3 本ある力士が相撲をとっている風刺画が掲載され問題になったことは記憶に新しい。それは海外に限られたことではない。小菅(2014)は日本においても、一部ネット・ユーザーたちからの福島非難があることを報告している。

「福島 農作物」を Yahoo^[48]で検索すると、東日本大震災から 4 年半以上経過した今日でも、枠外に表示される自動検索ツールに「福島 農作物 放射能」「福島 農作物 出荷停止」があらわれ、根拠のない風評の数々を見てとることができる。

「メディアは人々に直接的に影響を与える。すなわち、メディアでの情報量と人々が重要な問題だと思うものは、おおむね比例している」^[49]ことから、「フクシマ」をメディアが取り上げれば取り上げるほど、「フクシマ」が与える印象に—その解釈が誤っていようとなかろうと—人々は影響されることが増えることには違いないのである。

ところで、ウォルター・リップマンは著書『世論』の「ステレオタイプ」の章において、「いったん呼びさまされた先入観は、新たに内に捉えた映像を古いイメージで満たし、記憶によみがえってきたものをその世界に投影する」^[50]と指摘している。

こうした先入観は思想、価値観、事象、人物、物体等に対する評価まであらゆることに及んでいる。「われわれの意見は、他人による報告と自分が想像できるものから、あれこれつなぎ合わせてできたものにならざるをえない」^[51]とリップマンは言及したうえで、「自分たちの意見は、自分たちのステレオタイプを通して見た一部の経験にすぎない、と認める習慣」^[52]の重要性を説いている。

これを「フクシマ」「ヒロシマ」に当てはめると以下のように説明することができる。

[48] YAHOO!JAPAN 検索画面「福島 農作物」, http://search.yahoo.co.jp/search;_ylt=A7dPhg7OppxWKhoAFLiJBtF7?p=%E7%A6%8F%E5%B3%B6%E3%80%80%E8%BE%B2%E4%BD%9C%E7%89%A9&search.x=1&fr=top_gal_sa&tid=top_gal_sa&ei=UTF-8&aq=&oq=&afs=, 最終アクセス日 2016.1.18

[49] 関谷直也(2011)『風評被害 そのメカニズムを考える』, 光文社, P79L12-14

[50] W.リップマン著, 掛川トミ子訳(1987)『世論(上)』, 岩波書店 P124L8-9

[51] W.リップマン著, 掛川トミ子訳(1987)『世論(上)』, 岩波書店 P109L11-12

[52] 同上, P172L4-7

ー「フクシマ」を目にする前に「ヒロシマ」「ナガサキ」があった。それらが持つ「核」「原子力」「被爆」というイメージが人々の先入観に影響を及ぼしたー

そこで、このように仮説を立てることができる。「『フクシマ』は『ヒロシマ』のステレオタイプを踏襲した表象である」である。“被爆”と“被ばく”の違いの有無を考慮せずに、すでに存在し表象を確立している「ヒロシマ」につなげて「フクシマ」が語られ、単に同一視されることで、「フクシマ」は「ヒロシマ」が持つ、凄惨で恐怖の観念をそのまま受け入れざるを得なかったのではないだろうか。

「フクシマ」の最大の問題点は原因となる原発事故発生から瞬く間にメディアに出現し、意味が十分に理解されないまま世界中に広まったため、福島との分離に失敗したことである。福島との分離を提唱するためにも、ステレオタイプによって「フクシマ」表記が「ヒロシマ」以上に誤解や弊害を生み出されている例を探ることで、私が立てた仮説の検証を試みたい。

さらには、本稿で「フクシマ」のこれからを探りたいと考える。NHKのETV特集取材班で東日本大震災発生直後から「ネットワークでつくる放射能汚染地図」作成に取り組んだ七沢潔(2015)は、以下のように指摘している。

かつて広島の被爆体験が海外に伝えられ、核の非人道性についての人類共通の学びの場ヒロシマが誕生したように、フクシマとよばれる地が現れ、歴史に名を残すことがあるのだろうか。それはヒロシマの歩みを学ぶことからしかわからない^[53]

「フクシマ」のこれからを推しはかるためには、「ヒロシマ」の軌跡を文献や新聞記事をたどることが良策なのである。

第4章 新聞上における「ヒロシマ」「フクシマ」分析

4-1 調査対象・分析方法について

(1)調査対象の選定

情報の媒体にはテレビやラジオ、インターネット、新聞、書籍等があるが、資料として記

[53]七沢潔「操作された『記憶の半減期』～フクシマ報道の4年間を考察する」サステナビリティ研

5, 71-89, 2015-03 法政大学サステナビリティ研究所 http://repo.lib.hosei.ac.jp/bitstream/10114/11406/1/sus5_nanasawa.pdf, 最終アクセス日 2016.1.17

事検索が整備されており容易に記録を検索しやすいという観点から、本稿では、新聞を選択した。

テレビを対象にしなかったのは第二次世界大戦終戦時にさかのぼって分析するための映像記録の入手が困難なことや、音声メディアであるという性質上、カタカナによる表象の有無が「番組名」「テロップ」に限定され、放送内容(原稿)にカタカナ表記の意図が内包されているか否かについて判断することができないからである。(日本放送協会の鎌田靖によれば、テレビには「“音声メディア”であるために、発した言葉を漢字やカタカナに変換することは重要視されていない」^[54]という特徴がある)

また、インターネットによる情報や雑誌、書籍にいたっては、内容や本文中にカタカナ表記がなされていても網羅できる数を超えていることから、正確に分析することは不可能であることから調査対象には不適切と判断した。

新聞は発行部数の多い全国紙の中から1社(朝日新聞)と、東日本大震災の被災地の新聞社1社(河北新報)を対象とする。本稿で全国紙から朝日新聞を選択した理由は以下の先行研究を参考にした。

朝日新聞を対象に選んだ理由は、下記に記した2つの先行研究による。

安藤(2009)によれば、「原爆問題をテーマとした連載や企画物が登場するのは1952年の朝日新聞が最初」^[55]である。また、『ヒロシマ戦後史——被爆体験はどう受けとめられてきたか』や『ヒロシマ・ナガサキ』の著書である、宇吹 暁の言葉を引用し、「朝日新聞とNHKが原爆報道に果たして来た役割の大きさにも注目し、広島平和祈念式典に関しては、朝日新聞は第1回からその全てを一面トップかそれに準じる扱いで報道している」^[56]という朝日新聞の功績についてふれている。

また矢野(2013)は、次のように報告している。

「社説に初めて『ヒロシマ』が登場したのは1951年の『朝日新聞』である。『ノーモア・ヒロシマズ』という表現で紙面上に

[54] インタビュー,日本放送協会鎌田靖, NHK 解説委員兼キャスター, NHK 放送センター, 2015.10.14

[55] [56] 安藤裕子(2009), 「ヒロシマ・ナガサキはどのように表象されてきたか——公的記憶の変遷を辿る——」 早稲田大学大学院アジア太平洋研究科博士学位論文 <http://hdl.handle.net/2065/34955>, 最終アクセス日 2015.12.17

現れた。これは【No moreHiroshima's】という英語の表現をそのままカタカナ表記にしたものである」^[57]

また、被災地の新聞社として河北新報を選択した理由は次の2点である。

河北新報は、『河北新報のいちばん長い日 震災下の地方紙』（2011,文藝春秋より発行）にも震災時の様子が詳細に報告されているように、自らが被災し制作不可能に陥っても、有事における「緊急時の新聞発行相互協定」^[58]を結んでいた新潟日報社の協力を得て震災発生当日のうちに号外を被災者の避難所に届けた新聞社である。河北新報には「東北地方を代表するブロック紙として、1897年の「創刊以来、無休刊を宣言し、休刊日を除いて一日も休まず新聞を出し続けている」^[59]という精神が受け継がれており、未曾有の災害に遭遇し休刊を余儀なくされるような状況にあっても新聞を発行し届けることを、「使命であり、読者への恩返し」^[60]とした。そのように被災地に被災者に寄り添ってきた新聞社の性質を考慮し、河北新報を調査対象とした。

河北新報を対象に選んだもう一つの理由は、私がこの研究に取り組もうとしたきっかけに関係する。（東日本大震災の翌年に大学へ進学した私は、大学2年の春期講義「メディアの世界」^[61]で、河北新報の寺島英弥から被災者と向き合う姿勢に背中を押され、2か月後に福島での街頭取材に出向いた経験がある）

(2)キーワードの選定

「フクシマ」と「ヒロシマ」を新聞記事のデータによりキーワード検索する。

東日本大震災以前の、災害を被った日本の地名のカタカナ表記の中で、ここでは「ヒロシマ」を選択した。これは本稿の目的を、あくまでもカタカナによる表象分析であって、東日本大震災を境に表象された「フクシマ」とそれ以前にカタカナ表記されていたものとの関連や差異を検討することとし、「ヒロシマ」と「ナガサキ」を同じ性質とみなすことによ

[57] 矢野撰士(2013),『政治学研究』第49号,慶應義塾大学法学部政治学科ゼミナール委員会「原爆の記憶をめぐるメディア表象の政治社会学」, <http://www.clb.law.mita.keio.ac.jp/pls-committee/seijigakukenkyu-49/yano.pdf>, 最終アクセス日 2015.12.17

[58] 河北新報社著(2011)『河北新報のいちばん長い日 震災下の地方紙』,文藝春秋, p18L13

[59] 同上, p26L13

[60] 同上, p26L4

[61] 早稲田大学 2012 年度春期講義「メディアの世界」

り分析対象を「ヒロシマ」に絞り、「ナガサキ」を今回の調査対象から外した。

(3)分析方法

使用するデータベースは「朝日新聞データベースー聞蔵Ⅱビジュアル」^[62]「河北新報データベース」^[63]である。

「ヒロシマ」と「フクシマ」をデータから比較する方法として、原因となる出来事の発生からの期間が短く、その限られた4年半(2011年3月11日～2015年9月11日)に朝日新聞に登場した「フクシマ」の件数(1031件)に合わせて「ヒロシマ」(1945年8月6日～1031件)を分析する。また、「フクシマ」に関して全国紙とブロック紙を比較するために、同期間(2011年3月11日～2015年9月11日)に「フクシマ」が河北新報に登場した283件を分析する。具体的なサンプルは以下の通りである。

①朝日新聞データベース聞蔵Ⅱビジュアル「フクシマ」

2011年03月16日(天声人語)原発とダモクレスの剣

～

2015年09月08日(郷土ゆかりのほん)「井伏鱒二と戦争」 黒古一夫著 /群馬県
以上、1031件

②朝日新聞データベース聞蔵Ⅱビジュアル「ヒロシマ」

1948年9月23日「ヒロシマ」の主人公渡米__往来

～

1990年05月10日 軍都広島に加害責任めぐり論争 米紙が報道
以上、1031件

③河北新報データベース「フクシマ」

2011年04月06日 福島第1原発事故／原発後退、世界で加速／総発電量は減少傾向

～

2015年08月26日 地域振興策 具体化を／福島・富岡 最終処分場／県と2町が要望
以上、283件

[62] 朝日新聞データベース聞蔵Ⅱビジュアル <http://database.asahi.com/library2/main/start.php>, 最終アクセス日 2016.1.18

[63] 河北新報データベース <http://neokd.kahoku.co.jp/home.0.jsessionid=96495DF04586AD8BB5C9299661FB2860>, 最終アクセス日 2016.1.18

②の、聞蔵Ⅱビジュアル「ヒロシマ」に関しては、データが「朝日新聞収縮版 1879～1989」と「朝日新聞 1985～」の 2 つに分かれており、両者に 38 件の重複が見られたため、記事の内容を確認し正確な記事件数分の分析を行った。

朝日新聞縮刷版のデータベースは以下の 3 部である。

- 明治・大正紙面データベース：1879 年（創刊）～1926 年
- 昭和（戦前）紙面データベース：1926 年～1945 年
- 昭和（戦後）紙面データベース：1945 年～1989 年

上記から「ヒロシマ」を検索すると 565 件該当する。この段階で 1031 件に不足するため、この続きの記事は 1985 年から現在までのフォルダを検索した。

なお、朝日新聞、河北新聞共に自社発信の記事だけでなく、通信社から引用した記事も掲載される。特に、ブロック紙である河北新報では、通信社発信の記事の他にも、提携している他の新聞社からの記事が掲載される場合もある。以上のことから、検証したすべての記事が対象新聞社の意図で書かれたものと判断できない可能性も含まれるが、本稿では「読者がその記事を目にした時に直感的にどう受け取るのか」といった読者の目線を軸に研究するため、ここでは、検索した紙面に掲載された記事は、その新聞社が購買読者に向けて発信したものとみなして分析する。

4-2 朝日新聞における「ヒロシマ」

(表 1)

朝日新聞 ヒロシマ(1031 件)

放射能 意図		放射能 引用		戦争関連 意図		戦争関連 引用		無関係	
	外		外		外		外		外
315	193	284	190	4	3	23	18	0	1

朝日新聞において、1945 年 8 月 6 日以降「ヒロシマ」表記を含む記事 1031 件を検証した結果は以上(表 1)の通りである。

分類に当たって 5 項目(表 1 参照)を設定した。※「外」は海外に向けたもの、あるいは外国人の言葉を変換したものを指す。

各項目についての考察および分析意図、記事の例は以下の通りである。

①放射能 意図

8月6日の原子爆弾投下から放射能が見えない恐怖として人々を苦しめたが、「ヒロシマ」という表象で「核・原爆・放射能」の意味を表している割合は全体のおよそ95パーセントに上った。その982件のうち、新聞社の意図によるものがおよそ51パーセントと半数を占めていた。

1986年8月7日の記事では「とにかくあの一瞬を境にして“広島”が一挙になくなり、カタカナであらわす特別な近代都市“ヒロシマ”ができあがった。」^[64]とあり、1945年8月6日8時15分を境に、広島から新たな「ヒロシマ」が生まれたことを示唆している。

1984年8月5日の社説では「広島、長崎の被爆体験は、核廃絶の決意をともなったヒロシマという国際語になっているが、こうした危機感の原点として、世界的に新たな意味を持ち始めている。」^[65]と表現しており、発信者の意図として、カタカナ表記に国際語的役割をもたせている。このように、放射能に関連して、新聞社の意志で「広島」あるいはHIROSHIMAを「ヒロシマ」に変換して表現している記事がこの項目に当てはまる。

また、取材相手が放った言葉であっても、明確に取材対象者が「ヒロシマ」と可視化して表記したわけではなく、朝日新聞の記者が聞き取って文字に起こしたものであれば、朝日新聞の意図とみなす。例えば以下のようなものである。

サラリーマン男性(36)の取材のなかで、「被爆40年というが、ぼくは原子力40年だと思う。いまの核状況の中でヒロシマの役割は何か。何をやるべきかを考えるのが大切です。もちろん二世の健康問題も大切です。差別が同和のようになっても困ります。でも、これは平和運動への取り組み方次第で、どうすべきかが決まってくるものです。でも前途多難でしょうね。(1985年08月16日 朝刊「二世の思い 親の体験をつなぐ(原爆と差別:9)」)^[66]

これは、この男性が発した言葉を文字におこしたものであり、カタカナに変換したのは新聞社の意図であると解釈する。

[64] 朝日新聞データベース聞蔵Ⅱビジュアル, <http://database.asahi.com/library2/main/start.php>, 1986年8月7日付, 最終アクセス日 2016.1.18

[65] 同上, 1984年8月5日付, 最終アクセス日 2016.1.18

[66] 同上, 1985年08月16日付, 最終アクセス日 2016.1.18

このように発言をカタカナに変換したものうち、海外在住者が発した言葉の場合や世界に向けてのメッセージであると記事中に明確に定義されている場合、また、日本人が発信した「ヒロシマ」であっても明らかに受け手が海外の人である場合に関しては、表の各項目の右側に記してある「外」としてカウントしている。

例えば、1986年8月6日の記事に広島被爆調査で唯一の白人証言者として取材を受けたアメリカ人ドレイゴの言葉「それでも、広島はその後どうなったかと毎夏、ヒロシマを伝えるテレビをいつも見てきましたよ」^[67]が掲載されているが、「放射能 意図(外)」の典型例ある。すなわち、ドレイゴの会話に2度出てくる“Hiroshima”を「広島」「ヒロシマ」と別の表象で使い分けていることから、その解釈に新聞社の意図が反映されている。他にも、ソ連のセルギエンコ監督の「チェルノブイリはヒロシマ・ナガサキとおなじく危険で破壊的な科学文明のシンボルとなったと思います」^[68]という言葉の表現や33回忌の記事中で記された「ヒロシマを世界化できるか」^[69]等がこの例に当たる。

②放射能 引用

全体の95パーセントを占める「核・原爆・放射能」の982件のうち、新聞社の意図ではなく、そのまま引用したものはおよそ49パーセントと半数を占める。具体的には、前出の「放射能 意図」と同じように原爆投下による放射能との戦いの意味でカタカナにしている記事のうち、スローガンや番組名、集会名や公式文書などの新聞社が元の表記を引用している項目である。

例えば、国会議員の「ヒロシマ平和学習会」^[70]や核廃絶・非核・平和都市宣言を反映した作品である「絆（きずな）ー高校生とヒロシマ」^[71]や、広島市長の平和宣言内で表現される「…（中略）ヒロシマは、あの被爆の惨禍から、国際平和文化都市として再生し、ひたすら核兵器廃絶と、世界の共存と繁栄を訴え続け、ここに、42年目の8月6日を迎えた。…」^[72]などがあげられる。

海外が絡む記事を分類した「外」の項目にあたるものは、原水禁世界大会で発表された「ヒ

[67] 朝日新聞データベース聞蔵Ⅱビジュアル, <http://database.asahi.com/library2/main/start.php>, 1986年8月6日付, 最終アクセス日 2016.1.18

[68] 同上, 1989年4月25日付, 最終アクセス日 2016.1.18

[69] 同上, 1977年8月6日付, 最終アクセス日 2016.1.18

[70] 同上, 1990年7月21日付, 最終アクセス日 2016.1.18

[71] 同上, 1985年10月10日付, 最終アクセス日 2016.1.18

[72] 同上, 1987年8月6日付, 最終アクセス日 2016.1.18

ロシマ・アピール」^[73]や、核を保有する 5 カ国の新聞社のジャーナリストの会合「ヒロシマ座談会」^[74](朝日新聞社主催)などが該当する。

③戦争関連 意図

全体の 5 パーセント弱である「戦争関連」48 件のうち、新聞社の意図による割合はわずかに 1.5 パーセントである。

「戦争関連」に当てはまるものは、“戦争による被災都市”として平和をテーマにしている記事に見られる「ヒロシマ」表記の中で、直接的に放射能の意味を含まないものを指す。その中で、書籍タイトルやシンポジウムの名称ではなく、新聞社の意図によってカタカナ表記されているものを③の項目に分類する。

広島や長崎の場合、戦争と原爆を分けて考えることはできないが、戦争と平和という観点から「ヒロシマ」を捉えている例として、1988 年 03 月 09 日の記事『『平和教育の“にしきのみ旗”』としての『ヒロシマ』』^[75]がある。「ヒロシマ」を、“平和を伝達する役割”を担う言葉として扱っている。この項目の「外」にあたるものには、1970 年 6 月 8 日の記事において、ペルー大地震で町が瓦礫の山になった惨状を表す際に米国救援隊長が「ヒロシマ同様の惨状」^[76]とした表象が相当する。外国人の HIROSHIMA の変換したもののうち、放射能汚染とは関係のない例である。

④戦争関連 引用

この項目では直接的に放射能を戦争関連の記事の中で書籍名や会合名、スローガンなど、文字化されているものを引用している記事をカウントした。

例えば、「90 ヒロシマ・ナガサキの火音楽祭」^[77]を成功させる会などの団体名もその 1 つである。「外」に分類されるものに関しては、1989 年に平和を願って行われた、パールハーバー・広島間のヨットレース「ヒロシマカップ 8 9 オーシャンヨットレース」(日本外洋帆走協会主催)^[78]の記事や、火星と木星間の小惑星が世界的天文学者によって「世界の平

[73] 朝日新聞データベース開蔵Ⅱビジュアル, <http://database.asahi.com/library2/main/start.php>, 1982 年 8 月 6 日付, 最終アクセス日 2016.1.18

[74] 同上, 1987 年 8 月 8 日付, 最終アクセス日 2016.1.18

[75] 同上, 1988 年 3 月 9 日付, 最終アクセス日 2016.1.18

[76] 同上, 1970 年 6 月 8 日付, 最終アクセス日 2016.1.18

[77] 同上, 1990 年 3 月 13 日付, 最終アクセス日 2016.1.18

[78] 同上, 1988 年 4 月 17 日付, 最終アクセス日 2016.1.18

和のシンボルに」^[79]という思いから「ヒロシマ」と名づけられた記事が該当する。

⑤無関係

「ヒロシマ」の場合は 1 件しかなかった。「広島県本郷町のヒロシマ・コープ」^[80]という店舗の名称であった。

4-3 朝日新聞における「フクシマ」

朝日新聞 フクシマ(1031 件)

放射能	意図	放射能	引用	震災関連	意図	震災関連	引用	無関係	
	外		外		外		外		外
225	120	380	47	29	8	161	7	53	1

「フクシマ」に関しては、2011 年 3 月 11 日の東日本大震災以降 2015 年 9 月 11 日の 4 年半の間の新聞記事に関して、4-2 と同様の方法で仕分けた。4-2 との相違点は、4-2 では戦争関連だった項目を震災関連に変更し、その項目には“放射能に関係なく、復興も含め阪神淡路大震災時と同じ扱い”を記した記事を分類した。

①放射能 意図

「ヒロシマ・フクシマ 原発が放射能兵器になる時」^[81]2011 年 04 月 10 日とコラムに登場したように、放射能というメッセージを背負わされてカタカナ表記されているもののうち、引用でないものがこの項目に当てはまる。

「フクシマ」という表象で「核・原爆・放射能」の意味を表している割合は全体のおよそ 75 パーセントであり、その 772 件のうち、新聞社の意図によるものがおよそ 45 パーセントと半数近くを占めていた。

具体例として以下の記事を引用する。

「うつくしまとの響きがぴったりの『ふくしま』が、世界的な
原発事故の被災地『フクシマ』にかわった。春を迎え、満開の

[79] 朝日新聞データベース聞蔵Ⅱビジュアル, <http://database.asahi.com/library2/main/start.php>, 1989 年 3 月 30 日付, 最終アクセス日 2016.1.18

[80] 同上, 1989 年 10 月 31 日付, 最終アクセス日 2016.1.18

[81] 同上, 2011 年 04 月 10 日付, 最終アクセス日 2016.1.18

桜も新緑も、いつもと変わらぬ美しい姿を現した。ただ、放射性物質という目にみえないカーテンが一面を覆っていると考え
ると、悔しくて、切なくて、たまらない。」…(中略)…「うつ
くしまを満喫した一人として、フクシマがふくしまに戻る姿を
追いたい。」^[82]

「(声)若い世代 原発の『フクシマ』はイヤだ^[83]

そのうち、「外」に当てはまる例としては以下のような記事がある。

逆風、世界の原発 独、25万人反対デモ(中略)「原発を止め
ろ」「フクシマが起きた以上、止めるしかない」^[84]

「ピエルパオロ・ミッティカさん チェルノブイリとフクシマ
を撮った写真家 フクシマの立ち入り禁止区域で見た日めくり
カレンダーは、3月11日のままだった。」^[85]

これらの記事に見られる「フクシマ」表象のように、“フクシマ＝福島第一原子力発電所の
事故”と捉える記事がこの項目の中心である。

②放射能 引用

「核・原爆・放射能」の意味を表す「フクシマ」のうち、「フクシマ 50」に代表されるよ
うに引用として使っているものは、1031 件中 427 件と全項目の中で最も多い。

以下に具体例を示す。

立命館大学で行われた公開講座「『内部被曝(ひばく)』問題から
核／原子力体制を考える～ヒロシマ・イラク・フクシマ」2011
年 04 月 13 日^[86]

[82] 朝日新聞データベース聞蔵Ⅱビジュアル, <http://database.asahi.com/library2/main/start.php>, 2011 年 03 月 28 日付, 最終アクセス日 2016.1.18

[83] 同上, 2012 年 2 月 24 日付, 最終アクセス日 2016.1.18

[84] 同上, 2011 年 04 月 10 日付, 最終アクセス日 2016.1.18

[85] 同上, 2012 年 2 月 24 日付, 最終アクセス日 2016.1.18

[86] 同上, 2011 年 4 月 13 日付, 最終アクセス日 2016.1.18

歌壇・俳壇のヒロシマとナガサキの「ヒバク」過去ならず今フクシマが第三の「ヒバク」（足利）谷津英夫^[87]

そのうち、「外」に分類したものの例としては以下のようなものがある。

英国では、新設計画に抗議する24時間デモがあり、約1千人が「フクシマを忘れるな」と書かれたプラカードを手に行進^[88]

③震災関連 意図

「核・原爆・放射能」の意味だけを含んでいる「フクシマ」を排除し、主に東日本大震災の被災地として「フクシマ」を扱ったものをこの項目に分類する。その割合は全体のおよそ20パーセントであり、その205件のうち、新聞社の意図によるものはおよそ18パーセントであった。記事の具体例を以下に示す。

昨年3月の東日本大震災は、多くのアスリートを揺さぶった。福島県にゆかりの深い選手たちは、原発事故が地域に刻んだ傷に悩み、考えてきた。「五輪の舞台でできること、伝えられることは何だろう」…(中略)…それぞれの思いを秘め、フクシマからロンドンへ。^[89]

この場合、東日本大震災という未曾有の災害を乗り越えようとするアスリートの意志を証明したものという判断を下した。

震災・フクシマ・平和などをテーマに、フォークソングや自作曲を披露した。^[90]

そのうち「外」に分類したものに以下の記事がある。

(海外メディアが伝えた震災に対して朝日地球環境フォーラム

[87] 朝日新聞データベース聞蔵Ⅱビジュアル, <http://database.asahi.com/library2/main/start.php>, 2011年5月3日付, 最終アクセス日 2016.1.18

[88] 同上, 2012年3月12日付, 最終アクセス日 2016.1.18

[89] 同上, 2012年7月25日付, 最終アクセス日 2016.1.18

[90] 同上, 2012年10月1日付, 最終アクセス日 2016.1.18

2011 の紹介のなかで)『ツナミ』や『フクシマ』は世界にどう伝えられ、どんな反応を生んだのか。海外メディアの報道を、現場で取材した記者、ウオッチしたジャーナリストが分析し、『あるべき報道』を論じる。日本メディア報道の検証にもなることだろう。」^[91]

(放射能について一切触れていない記事のなかで)「海外では『世界から見た日本』も意識させられる。東日本大震災後の昨年7月に旅をした南仏では、子どもたちが日本のツアー客と知ると『フクシマ、フクシマ』と言って逃げ出した。」^[92]

④震災関連 引用

東日本大震災関連の「フクシマ」205 件のうち、引用として使用されたものはおよそ 82 パーセントであった。具体例を以下に引用する。

吉祥寺で開かれる福島応援ライブ『私達はフクシマを忘れない』と題したライブを開く」^[93]

建築家・内野輝明さんが福島震災復興支援と徳島の防災対策をクルマの両輪のように進めていこうという意図で、被災地の視察に行った時に現地の建築家さんたちと立ち上げた「フクシマトクシマの会」の懇親会(記事の要約)^[94]

以下に「外」に分類したものの例を示す。

フクシマの詩、世界へ 美しいふるさと、残したい 秦野の詩人が翻訳・出版／神奈川県 《フクシマの四季》(俳文)
あの津波 何だったのか 春の海
墓石が 横たわっている 夏日かな
降る雪や 街をうろつく 牛の群れ^[95]

[91] 朝日新聞データベース聞蔵Ⅱビジュアル, <http://database.asahi.com/library2/main/start.php>, 2011 年 9 月 5 日付, 最終アクセス日 2016.1.18

[92] 同上, 2012 年 12 月 28 日付, 最終アクセス日 2016.1.18

[93] 同上, 2011 年 8 月 14 日付, 最終アクセス日 2016.1.18

[94] 同上, 2011 年 11 月 6 日付, 最終アクセス日 2016.1.18

[95] 同上, 2014 年 8 月 5 日付, 最終アクセス日 2016.1.18

この詩には「街をうろつく 牛の群れ」^[96]で原発事故を連想させるものの、東日本大震災による地震や津波で壊された町の惨状を世界に発信しようとしている点を考慮し、この項目に分類した。

⑤無関係

上記の分類に属さないものは、「大槌町・弓道場で紹介された、漢字がまだ分からない避難者リストの中で、苗字がフクシマさんだった場合」^[97]や、ワインを堪能する祭典「ワインヴァン ヴィーノ フクシマ」^[98]、などがある。

4-4 河北新報における「フクシマ」

河北新報 フクシマ(283 件)

放射能 意図		放射能 引用		震災関連 意図		震災関連 引用		無関係	
	外		外		外		外		外
80	40	86	21	9	0	31	3	13	

分類の仕方については 4-3 と同様。

紙面に登場する「フクシマ」を朝日新聞と同期間検索したところ、朝日新聞が 1031 件に対し、河北新報では 283 件と朝日新聞の 3 分の 1 弱であった。

①放射能 意図

全体の 283 件のうち、「フクシマ」を核や放射能、原発に絡めて使っているものの割合は、およそ 80 パーセントである。その 227 件のうち、新聞社の意図によるものはおよそ 52 パーセントと半数を占めていた。具体的な新聞記事を以下に引用する。

「汚された大地と『フクシマ』というレッテルに、県民は長く苦しむことになる。」^[99]
(社説)「核兵器廃絶を願うヒロシマ、ナガサキが抱いた平和利用への期待感は、フクシマで失望感に暗転した。三つの地域が

[96] 朝日新聞データベース聞蔵Ⅱビジュアル, <http://database.asahi.com/library2/main/start.php>, 2014 年 8 月 5 日付, 最終アクセス日 2016.1.18

[97] 同上, 2011 年 3 月 16 日付, 最終アクセス日 2016.1.18

[98] 同上, 2014 年 9 月 27 日付, 最終アクセス日 2016.1.18

[99] 河北新報データベース, <http://neokd.kahoku.co.jp/home.0.jsessionid=96495DF04586AD8BB5C9299661FB2860>, 2012 年 1 月 1 日付, 最終アクセス日 2016.1.18

1本の線で結ばれた時、見えてきた『過ち』がある。」^[100]

「3・11後、『フクシマ』は『工業的・技術的カストロフィー』の象徴となる。」^[101]

そのうち、「外」に分類したものを以下に示す。

福島復興ビジョン検討委内での赤坂氏のコメントより「エネルギー問題に向き合うことで、原発事故で世界に知られた『フクシマ』の負のイメージを拭い去りたい」^[102]

②放射能 引用

放射能関係に対する表象 227 件のうち、引用で使っている記事の割合は、新聞社の意図とほぼ同じくおよそ半数である。具体例を以下に示す。

(角川春樹さんの句集「白い戦場」より)

「東京電力福島第1原発事故を詠んだ数々の句には、事故を「人災」と言い切る角川さんの怒りが静かに込められる。＜福島がフクシマとなる忌なりけり＞」^[103]

原水爆禁止日本国民会議（原水禁）などの主催。国内外から約850人が参加し、「豊かな自然と健やかな命を守るためにフクシマから声を上げよう」とするアピールを採択した。^[104]

以下には「外」に分類したものを示す。

(フランスの週刊紙カナル・アンシェネの9月11日の紙面より)「フクシマのおかげで相撲が五輪種目になりました」「五輪のプールはもうフクシマに」^[105]

[100] 河北新報データベース, <http://neokd.kahoku.co.jp/home.0?jsessionid=96495DF04586AD8BB5C9299661FB2860>, 2012年8月6日付, 最終アクセス日 2016.1.18

[101] 同上, 2012年12月16日付, 最終アクセス日 2016.1.18

[102] 同上, 2011年5月14日付, 最終アクセス日 2016.1.18

[103] 同上, 2011年7月26日付, 最終アクセス日 2016.1.18

[104] 同上, 2011年8月1日付, 最終アクセス日 2016.1.18

[105] 同上, 2013年9月12日付, 最終アクセス日 2016.1.18

③震災関連 意図

朝日新聞の「フクシマ」同様に、「核・原爆・放射能」の意味だけで使用される場合を除いて、震災関連で「フクシマ」を扱ったものをこの項目に分類する。その割合は全体の 283 件のうちおよそ 15 パーセントであり、そのうち新聞社の意図で使用したものは 9 件だけである。新聞社の意図として、原発に関連の少ない記事では「フクシマ」を好んで使っていないことがうかがえる。記事の具体例を以下に示す。

東北の本棚／心に湯気をたてて」(和合亮一 著)／詩人の視点、
震災つづる「家族や古里を愛し、震災後の復興がままならない
『フクシマ』を案じる思いがにじみ出ている」^[106]
ペンとカメラ @フクシマ／希望の灯、夜明けを信じ一杯^[107]

これらの「フクシマ」には復興を願う、地元目線の思いが含まれていることも興味深い。

④震災関連 引用

東日本大震災関連の「フクシマ」43 件のうち、引用されたものはおよそ 8 割の 34 件であった。具体例を以下に引用する

河北川柳／雫石隆子 選
フクシマの次は遺産の平泉／仙台・太白 木下正恒^[108]
「フクシマ被災者受入推進事務局」日本事務局^[109]

⑤無関係

全体の 283 件のうち、およそ 5 パーセントが「無関係」に分類された。以下に具体例を示す。

福島では原発避難区域内の富岡町（避難指示解除準備区域）に
ある既存の民間管理型最終処分場フクシマエコテッククリーン

[106] 河北新報データベース,<http://neokd.kahoku.co.jp/home.0;jsessionid=96495DF04586AD8BB5C9299661FB2860>, 2014 年 2 月 10 日付, 最終アクセス日 2016.1.18

[107] 同上, 2013 年 12 月 12 日付, 最終アクセス日 2016.1.18

[108] 同上, 2011 年 7 月 15 日付, 最終アクセス日 2016.1.18

[109] 同上, 2012 年 6 月 5 日付, 最終アクセス日 2016.1.18

センターを転用する計画。国の受け入れ要請に対し、議論は平行線だ。^[110]

「無関係」の10件のうち、9件は「フクシマエコテッククリーンセンター」の記事であった。

4-5 分析結果および改善点

以上の新聞記事分析から見てきた表象について以下に考察する。

「ヒロシマ」は惨状を現すシンボルでもある点

「ヒロシマ」は惨状を現すシンボルにもなりうることが分かった。

例えば、海外では、朝日新聞の1970年6月8日「ヒロシマ同様の惨状」^[111]と題されたペルー大地震の記事や、1984年11月20日「メキシコのガス爆発 避難民襲う熱い鉄片 過密都市、恐怖まざまざ」^[112]という記事内の「全身から血を流し路上にうずくまる重傷者がつぶやいたのは『まるでヒロシマだ』という一言だった。」^[113]という表現がなされていた。

また、国内においても1970年8月17日「交通事故死 ヒロシマ並みの数に 今年も1万人 戦後25年で22万余」^[114]という使われ方がある。

ペルー大地震の記事を例にとれば、“原爆・核・放射能”の意味を持ったヒロシマが、“酷い惨状”という核とは無関係の共通点で、地震の光景を例えるための便利な言葉として扱われている点に問題を感じる。確かに、地震による壊滅的な情景のイメージを共有する為に、原爆を投下された広島に例えることは便利で効率的なのは理解するが、両者を同一視することにより、もしくは使う必要がないときに無駄に使用されたために、読者に歪んだイメージを与えることに加担してしまったと言える。

上記の交通事故死の記事も、死亡者数の多さを誇張するために「ヒロシマ」を使って表現

[110] 朝日新聞データベース聞蔵Ⅱビジュアル, <http://database.asahi.com/library2/main/start.php>, 20

15年4月2日付, 最終アクセス日 2016.1.18

[111] 同上, 1970年6月8日付, 最終アクセス日 2016.1.18

[112] 同上, 1984年11月20日付, 最終アクセス日 2016.1.18

[113] 同上, 1984年11月20日付, 最終アクセス日 2016.1.18

[114] 同上, 1970年8月17日付, 最終アクセス日 2016.1.18

しており、無駄に恐怖感を煽り、注意喚起をしたいという意図を感じざるを得ない。

「ヒロシマ」と「フクシマ」の表象の違い

基準をそろえて、朝日新聞で出来事が起こった時からカタカナ表記が氾濫していく流れを検証すると、広島は原爆を投下された 1945 年 8 月 6 日以降 1948 年 9 月 23 日に「ヒロシマの主人公渡米」^[115]という記事で初めて広島がカタカナ表記された。ただし、これは「戦争関連 引用」に当たるものであり、社の意図ではない。新聞社としての意図が初めて見られたのは 1959 年 7 月 29 日のことである。原水爆禁止世界大会の記事で、「政争うずまぐヒロシマ」^[116]というものだ。

さらに「外」に分類されない国内向けの記事には、1959 年 8 月 6 日の「ヒロシマ描いた記録 小説詩などの紹介」^[117]がある。この記事では原爆関連の書籍を紹介しているが、書籍名ではないところで「ヒロシマの原爆の悲惨や、原子病で苦しんでいる人たちをかいいた…」^[118]という文章がある。

これに比べて朝日新聞で「フクシマ」を検証すると、2011 年 3 月 11 日からわずか 5 日後の 3 月 16 日に初めて「フクシマ」が使われており、さらに 1 件目に当たるこの記事は早速「放射能 意図」に値するものだった。天声人語でもあるこの記事は「原発とダモクレスの剣」^[119]と題され、「これまで『原発の二大事故』は、米国のスリーマイル島とソ連のチェルノブイリだった。こののち、フクシマを含めて『三大』となるのは現時点の規模でも間違いない。」^[120]と記されている。

このことから、「ヒロシマ」は海外が使い始めたものを引用するところから 10 年以上もの月日を経て、だんだん日本的に吸収されていったのに対し、「フクシマ」は「ヒロシマ」の例をふまえて最初から日本的な放射能のイメージを背負って紙面に登場したことが分かる。

また、表の比較より、「ヒロシマ」の大部分が「放射能」に関連付けた表象に用いられてい

[115] 朝日新聞データベース聞蔵Ⅱビジュアル, <http://database.asahi.com/library2/main/start.php>, 1948 年 9 月 23 日付, 最終アクセス日 2016.1.18

[116] 同上, 1959 年 7 月 29 日付, 最終アクセス日 2016.1.18

[117] 同上, 1959 年 8 月 6 日付, 最終アクセス日 2016.1.18

[118] 同上, 1959 年 8 月 6 日付, 最終アクセス日 2016.1.18

[119] 同上, 2011 年 3 月 16 日付, 最終アクセス日 2016.1.18

[120] 同上, 2011 年 3 月 16 日付, 最終アクセス日 2016.1.18

るのに対し、「フクシマ」では4分の1は震災を中心に「放射能」以外の意味でも用いられていることが分析により検証された。地震と被ばくというダブルの被害を被った「フクシマ」の複雑さと表象の難しさが理解できる。

朝日新聞と河北新報の「フクシマ」の扱いの違い

同期間の同時期における「フクシマ」は、朝日新聞 1031 件に対し河北新報 283 件で、明らかに全国紙より少なく、慎重に「フクシマ」を使用していることがわかる。

また、河北新報では朝日新聞に比べて「震災関連 意図」に分類される記事が圧倒的に少なかったことから同じことが伺える。河北新報での「震災関連 意図」は9件であったが、そのうち7件は連載中の特集のタイトルとしてのフクシマ表記であり、本文内に深い意味はないものだった。放射能以外の震災関連で「フクシマ」を用いることについては、とりわけ細心の注意が必要であると判断したためではないかと推測する。

読者は放射能とは関係ないカタカナ表記を目にした時にも「放射能」「被ばく」の印象がステレオタイプとなり、負のイメージを先行させてしまう恐れがある。また、「フクシマ」の使い方に明確な統一性がないため、月日の経過とともに記者の裁量で表象もあいまいになり、使わなくてもいい部分に対してもカタカナ表記を使うようになってしまう危険性がある。それを憂慮し、被災地に密着している新聞社としては、不必要に「フクシマ」を使うことを避けたものと考えられる。(この件に関しては河北新報社寺田英弥へ取材し、終章に内容を記載する) 福島に寄り添い、誤ったイメージを持たせる表象を回避したことは評価に値するのではないだろうか。

「Image, Fukushima」の扱いについて

「Image, Fukushima」とは、映画やトークセッションで3.11後の福島の現実を考えるイベントであるが、それを伝える表象に記事によって2つのケースがあることが記事分析により明らかになった。両者は同じく河北新報の記事であるが、2011年11月19日付の記事ではそのまま「Image, Fukushima」^[121]と表されているが、2011年11月27日付の記事では「イメージ・フクシマ in 金沢」^[122]と表現されている。

[121] 河北新報データベース, <http://neokd.kahoku.co.jp/home.0.jsessionid=96495DF04586AD8BB5C9299661FB2860>, 2011年11月19日付, 最終アクセス日 2016.1.18

[122] 同上, 2011年11月27日付, 最終アクセス日 2016.1.18

これらは同じ引用元でもカタカナに変換されることがあるという例である。受け手に与える印象を考慮すれば、「Image, Fukushima」のままに表すことが望まれる。

関連記事の増減に関する法則

新聞記事进行分析の中で、関連記事の増減にある法則があることに気づいた。「ヒロシマ」が現れる件数に関して、チェルノブイリ原発事故や福島第一原発事故発生と関連して増加することに加え、「ヒロシマ」は原因発生から長期にわたり経過を分析できるため、27 年や 33 年目など、死者を弔う為に何周忌という年に記事が急増している事を発見できた。このように、何周忌という年が関係するのは犠牲者の数が多いことと関係しているのではないだろうか。一方、「フクシマ」に関しては原因発生から歳月の経過が浅いため検証には至っていないが、今後の経過を予測すれば「ヒロシマ」とは違った区切り(5 年,10 年…)となる年に関連記事が増えるのではないかと推測される。

改善すべき点

今回は新聞記事の質的分析を行ったが、分析途中で量的分析も必要であると理解した。分析対象についても本稿で使った全国紙、ブロック紙に加え、地方紙を分析することや、全国紙に対しては 2 社以上分析することで、より明確な検証を得られるであろう。

また、4-1 で活字媒体ではない点を考慮し分析対象から外したテレビについても、入手可能な範囲内で長期にわたり「番組名」「サブタイトル」「テロップ」を分析することで、量的分析が図れたのではないかと。日本放送協会の鎌田靖への取材によれば、新聞記事に加え、テレビの番組名等で使用される「フクシマ」や「ヒロシマ」についても“何年目に何件”という量的分析を行うことが、風化の流れを読み取るために有効であるとされた。

考察

5-1 カタカナの使用基準に対する仮説の検証

第 1 章において、私は「8: 和語・漢語が国際社会で使用され“外来語的”性質を帯びた語は、カタカナで書け」という仮説をたてた。

「ヒロシマ」に関しては、先行研究により明らかになった、ヒロシマが海外で“原爆使用・原爆被害”の意味で使われ確立されてきたことや、朝日新聞の 1984 年 8 月 5 日の社説で「広島、長崎の被爆体験は、核廃絶の決意をともなったヒロシマという国際語になってい

る」^[123]とあることから、国際社会で通用した表象であることが実証された。「フクシマ」についても、先行研究から、小林(2013)の「世界規模で『いささか恐ろしい、あるいは過酷な名』として認識されている」^[124]ことや「フクシマ 50」から、国際的に通用する表象であることが理解できる。

「ヒロシマ」や「フクシマ」は、高野洋雄(2014)が気象用語解説の中で「地震や火山活動等の地殻変動によって励起された波を表す学術用語」^[125]と説明している「ツナミ」や、2-1 において示した通り“世界共通語”として確立している「ヒバクシャ」と同様な位置づけに置くことができるのである。そのような観点から判断すれば、カタカナの使用基準に対する仮説は検証されたと考えられる。

さらに第4章で新聞記事分析した中に、カタカナ表記の使用に関して新たなケースがあることがわかった。福島との意味の分離を図って、あえて「フクシマ」という表記を使うというものである。僧侶で芥川賞作家の玄侑宗久は朝日新聞の特集「フクシマの先 番外編」で、「フクシマ」と書くときの意図にふれた。

福島とフクシマ。言葉は繊細な方がいいと思っているので、原稿では書き分けています。

例えば、県全体が汚染地域だ、という大ざっぱな語られ方があります。そういう考え方についてはフクシマと書く。漢字では書きたくありません。

ひらがなだと湿りすぎで、カタカナだと突き放したイメージになる。こうした書き分けは日本語独特のものでしょうか。フクシマという表現は今後に残っていくのではないのでしょうか。^[126]

玄侑は放射能汚染が福島全域に及んでいるという誤解を払拭するために、出来事、あるいは

[123] 朝日新聞データベース聞蔵Ⅱビジュアル, <http://database.asahi.com/library2/main/start.php>, 1984年08月5日付, 最終アクセス日 2016.1.18

[124] 小林宏朗(2013), 日本マス・コミュニケーション学会研究発表論文「新聞で語られた東日本大震災における「フクシマ」と「ふくしま」」, http://mass-ronbun.up.seesaa.net/image/2013fall_C4_Kobayashi.pdf 同上,付, 最終アクセス日 2016.1.18

[125] 高野洋雄(2014), 「気象津波 (meteo-tsunami)」, http://www.metsoc.jp/tenki/pdf/2014/2014_06_0058.pdf, 最終アクセス日 2015.12.17

[126] 朝日新聞データベース聞蔵Ⅱビジュアル, <http://database.asahi.com/library2/main/start.php>, 2013年01月11日付, 最終アクセス日 2016.1.18

は一定の地域に限定した「フクシマ」を使用しているのである。そういう考えのもと、「福島」と「フクシマ」は使い分けられ、東日本大震災発生年に『福島に生きる』は執筆された。『福島に生きる』でフクシマが使われたのは第3章の「東京から見た『フクシマ』」^[127]に限られており、「フクシマ復興への願いを込めて」^[128]などわずかに3ヶ所のみであった。

さらに松岡俊二(2015)は福島とフクシマを使い分けについて持論を次のように示している。

福島の方がたには、フクシマはヒロシマを連想させ（まさにそうなのですが）、被爆者というイメージを強調することになり、自分たちは被爆者だと言われているようで嫌だとの意識があることも事実です。また、今のところ、多くの福島人は、フクシマという表記を積極的に使っていません。そうした上で、これからも、私自身は、自らへの問題提起も含め、福島とフクシマを使い分けていこうと考えています。（中略）福島を、福島としてだけでなく、「フクシマ」として人類史上に位置付けることが必要であり、福島の教訓を明らかにし、それを今後の人類社会に活かすことが重要であり、そうしたことが出来れば、「フクシマ」という表記をあえて使う必要もなくなるだろうと考えています。^[129]

カタカナ表記することによって、従来の固有名詞に新たな意味を付随させる必要があると判断したときにも、カタカナを使用する場合があることがわかった。

先の、玄侑(2011)や、松岡(2015)のカタカナ使用の基準を、成田と榊原(2004)の「日本語の表記戦略(仮説)」^[130]に照らし合わせると、「6. 音を明示したい、意味をきわだたせたい、などの表現意図があるときは、カタカナで書け。」^[131]が相当であろうが、“意味をきわだたせたい”ためではなく“意味をはき違えさせたくない”“新たな意味を付随される”ため

[127] 玄侑宗久(2011)『福島に生きる』,双葉社, P95L1

[128] 同上, P142L11

[129] 松岡俊二(2015), 「『フクシマ』という表記について」, <http://www.waseda.jp/prj-matsuoka311/material/fukushima20150302.pdf>, 最終アクセス日 2016 年 1 月 18 日

[130][131] 成田徹男・榊原浩之(2004), 人間文化研究 2, 41-55, 2004-01-10 名古屋市立大学「現代日本語の表記体系と表記戦略：カタカナの使い方の変化」, <http://ci.nii.ac.jp/els/110004047607> 最終アクセス日 2016.1.18

である。ゆえに、私は成田と榊原(2004)の「日本語の表記戦略(仮説)」^[132]に訂正を加え、「6. 音を明示したい、意味をきわだたせたい、意味をはき違えさせたくない、新たな意味をもたせたい、などの表現意図があるときは、カタカナで書け。」とすることを提言したい。

5-2 仮説：『フクシマ』は『ヒロシマ』のステレオタイプを踏襲した表象」の検証

本稿では、「フクシマ」がどのように「ヒロシマ」と関連付けられて表象されてきたのかを、以上に示した先行研究や新聞記事分析で検証してきた。それをさらに実証するために、「フクシマ」が「ヒロシマ」との関連で同一視されることへの問題提起を試みたい。

①「フクシマ」が「ヒロシマ」と同様に扱われてはならない理由-1

1945年の原爆投下と2011年の福島第一原発事故による放射能被害の違いの一つには、被害を被った地域の範囲が関係している。

「ヒロシマ」に関しては次の通りである。

日本における第二次世界大戦の舞台は空襲を受けた日本各地であり、広島、長崎だけではない。例えば私が祖母から空襲の話聞かされた香川県をカタカナで「カガワ」と認識している人はいないだろう。そのために「ヒロシマ」「ナガサキ」のカタカナ表記語が土地の名称を指し示すものではなく、原爆の意味を表していることが理解できる。

そのために、「ヒロシマ」「ナガサキ」というカタカナ表記が日本発祥ではないうえに、長い間日本では「ヒロシマ」「ナガサキ」の使用を控えていたのではないだろうか。広島市長が1947年の第1回平和祭以来、朝鮮戦争が勃発した1950年を除いて毎年8月6日に発表してきた「平和宣言」においても20年以上もの間「ヒロシマ」を使用することはなかった。「ヒロシマ」が平和宣言に初めて登場したのは1969年の『『ヒロシマ』を繰り返さないための砦』^[133]であり、「ヒロシマの心」^[134]という表現を用いたのは1972年が最初

[132] 成田徹男・榊原浩之(2004), 人間文化研究 2, 41-55, 2004-01-10 名古屋市立大学「現代日本語の表記体系と表記戦略：カタカナの使い方の変化」, <http://ci.nii.ac.jp/els/110004047607> 最終アクセス日 2016.1.18

[133] 広島市ウェブページ「平和宣言」, 昭和44年(1969年), <http://www.city.hiroshima.lg.jp/www/contents/1111724897403/index.html>, 最終アクセス日 2016年1月17日

[134] 広島市ウェブページ「平和宣言」, 昭和47年(1972年), <http://www.city.hiroshima.lg.jp/www/contents/1111724149106/index.html>, 最終アクセス日 2016年1月17日

であった。それ以前は「広島悲劇」^[135]「平和都市『ひろしま』」^[136]という表現を用いていた。

同様の見解を柴田(2015)も著書の中で展開している。

日本で原爆被害のことを、ヒロシマ、ナガサキといった固有名詞で呼ぶことがなかったのは、あまりにも多くの他の場所が空襲を受けて破壊されたため、「原爆」という爆弾の種類で区別をつけるほかなかった、とも言えるのではないだろうか。^[137]

一方「フクシマ」に関しては、2011年の大震災で被害を被った地域が国内の限定された範囲であることから、福島と「フクシマ」の分離が確立されないまま「フクシマ」というカタカナ表記がいきなり増えた。「フクシマ」が「ヒロシマ」を踏襲して、放射能のイメージを背負って紙面に登場したことは第4章の新聞記事分析の考察で明らかにした通りである。

②「フクシマ」が「ヒロシマ」と同様に扱われてはならない理由－2

福島の思いは、広島の思いと異なる感情がある、あるいは同じ位置に至っていないことが理由のひとつである。

ところで、広島はヒロシマと表象されることに対してどのように捉えているのだろうか。福島同様に県民感情として悲壮感、抵抗感、嫌悪感を持っているのではないか、という見解もあるのは確かだ。

広島に原爆が投下されてから20年後の新聞記事（朝日新聞1965年8月7日）に、「広島の人たちが『平和』といい、『祈り』というとき、それは決して感傷ではない。しかし、非難をおそれずにいうならば、広島にことよせて、『よそ者』たちがくり返すことで、これらの言葉は、そらぞらしい感傷の手あかによごれた」^[138]とあった。この、「よそ者」という感情を、「福島第一原発事故の犠牲となった福島では福島県以外の人たちに対し抱くことが

[135] 広島市ウェブページ「平和宣言」,昭和30年(1955年), <http://www.city.hiroshima.lg.jp/www/contents/1111737886692/index.html>, 最終アクセス日 2016年1月17日

[136] 広島市ウェブページ「平和宣言」,昭和33年(1958年), <http://www.city.hiroshima.lg.jp/www/contents/1111736889599/index.html>, 最終アクセス日 2016年1月17日

[137] 柴田優呼(2015)『“ヒロシマ・ナガサキ”被爆神話を解体する』, 作品社, P124L6-8

[138] 朝日新聞データベース聞蔵Ⅱビジュアル, <http://database.asahi.com/library2/main/start.php>, 1965年8月7日付, 最終アクセス日 2016.1.18

ある」^[139]と河北新報の寺島より直接伺った。被爆地広島と被ばく地福島とに共通した感情があることが理解できる。

他方、小菅(2014)は福島と広島の感情の違いがあることを次のように指摘している。

被爆地としての広島をヒロシマ、長崎をナガサキと表記することは、今日、広島と長崎に強いられた苦悩が国際的に認知されていることを意味する。ゆえに、これら二都市をカタカナ書きで表記しても、「ノーモア・ヒロシマ、ノーモア・ナガサキ」を叫んでも、広島や長崎に暮らす人びとの多くは、すくなくとも、不信感や強い反発を抱くことはないだろう。(中略) 他方、福島に暮らす人びとのなかには、「福島はフクシマじゃねえ」と、勝手にカタカナ書きにされることに反発を表明する人びともいる^[140]

小菅(2014)の指摘通り、広島の感情が福島と異なっているとすれば、広島を、こうした「よそ者」に対する嫌悪感から解放し「平和」のメッセージの発信者とならしめたのは、原因の発生から「ヒロシマ」を引用ではなく新聞社の意図でもって使われだすまでに要した時間(朝日新聞を例にとれば1959年7月29日までの14年間)と、広島と「ヒロシマ」が公的に分離することに成功したことが理由ではないかと考える。中でも広島市長が世界に向けて発信する「平和宣言」で1969年から「ヒロシマ」が登場したことや、1986年8月に「平和サミット in ヒロシマ」が開催されたことを皮切りに「国際平和シンポジウムを開催」や「国連軍縮広島会議」が広島で開催されたことが広島県民感情にプラスの影響と平和都市としての誇りと使命を抱かせたのではないだろうか。朝日新聞の記事にも見られるように「被爆都市・ヒロシマ」^[141]と「国際平和都市広島」^[142]として、「ヒロシマ」と「広島」を分離させることに成功している。

ただ、終戦から40年を経た1985年8月の朝日新聞の記事に「ヒロシマ」がもたらす差別の実態が以下のように報告されている通り、広島も「ヒロシマ」の呪縛から解き放された

[139] インタビュー(要約),河北新報社寺島英弥, 河北新報解説委員兼記者, 高田牧舎, 2015.11.21

[140] 小菅信子(2014)『放射能とナショナリズム』, 彩流社, P4L16-P5L5

[141] 朝日新聞データベース聞蔵Ⅱビジュアル, <http://database.asahi.com/library2/main/start.php>, 1979年3月26日付, 最終アクセス日 2016.1.18

[142] 朝日新聞データベース聞蔵Ⅱビジュアル, <http://database.asahi.com/library2/main/start.php>, 1979年7月25日付, 最終アクセス日 2016.1.18

のではない。

結婚は、原則として当人同士が愛し合っているものだろう。(中略) だが、見合いの場合、ヒロシマはかなりのハンディになる可能性があるとはいえそうだ。とくに女性の場合は……。^[143]

カタカナ表記に対して、広島の違いが疎外感や嫌悪感を超越したと解釈されるのは、苦悩をいまだ伴いながらも、地名を表す固有名詞と「ヒロシマ」との分離によって“自分たちの経験を共有して生かそうとする次のステージ”に至ったからである。

他方、福島は 3-3 「フクシマ」表象の問題点でもふれたように、現段階では負の感情を超越した段階には至っていない。福島第一原発事故発生直後から引用のみならずメディアの意志によって登場した「フクシマ」は、被ばくに被爆を絡められながら、正しい情報のないままに、瞬く間に拡散されていったのである。そこには県民感情を無視したものや周りが勝手に作り上げた「フクシマ」の虚像が含まれている。この件に関して、朝日新聞の記事では日本原水爆被害者団体協議会（被団協）で長年、被爆者の健康相談をしてきた伊藤直子の指摘を以下のように紹介している。

「はやりのフクシマでなく、福島のことを伝えて下さい」(中略) 伊藤さんによると、「ヒロシマ・ナガサキ」は後年になって出てきた表現だという。『フクシマ』という書き方は原発事故後、すぐに出てきた。福島に住む人の顔が見えないまま、イメージが先行しているのでは」と指摘する。^[144]

この記事を書いた記者は、「少しでも、等身大の実情が全国に伝われば、と願う」^[145]という言葉で記事を締めくくっていた。

終章ー「フクシマ」のこれからはどうあるべきか、報道はどのように伝えるべきか

2-3 において、先行研究を通して、「ヒロシマ」という表象が日本という限定された地域の出来事に封じ込めたことを確認したが、「フクシマ」が語られることがもたらす問題として、

[143] 朝日新聞データベース聞蔵Ⅱビジュアル, <http://database.asahi.com/library2/main/start.php>, 1985 年 8 月 6 日付, 最終アクセス日 2016.1.18

[144] 同上, 2013 年 1 月 4 日付, 最終アクセス日 2016.1.18

[145] 同上, 2013 年 1 月 4 日付, 最終アクセス日 2016.1.18

「象徴としての『フクシマ』が出回れば出回るほど、現実の福島が抱えている問題が語られなくなってしまう」^[146]危険性を指摘する見解がある。地名という固有名詞をカタカナで表象する場合には、慎重に取り扱う必要がある。「これからはフクシマに触れずにヒロシマ・ナガサキを語っても世界は聞き入れてくれまい」^[147]という意見が新聞記事の中に見受けられたが、「フクシマ」を「ヒロシマ」と同じ土俵で語ることも誤解を生む要因ではないかと思えてならない。

ところで、「フクシマ」のこれからを「ヒロシマ」の軌跡から推測すれば、“風化”と“福島との別離”である。

まずは風化であるが、新聞記事を検索していくと、「ヒロシマ」にも風化を懸念する声や風化の現象がいくつか寄せられていた。その中のいくつかを抜粋する。

「ヒロシマよりスキー？ 平和記念館への修学旅行生減る」^[148]

「ヒロシマの風化が進んでいる。教育現場でも、原爆のこと、平和問題を語ろうとする行動に風当たりが強くなってきた。教師自身が核の問題を語ることを自己規制する空気が濃くなってきた。恐ろしいことだ」^[149]

観光地「ヒロシマ」に疑問（中略）被爆建物の保存には消極的なのに、地上600メートルの「ピースタワー」は歓迎する。（中略）被爆者は、いつの日か、死に絶える。明るいヒロシマから原爆の痕跡が消える。そのとき、「過ちはくり返さない」と誓ったことまで忘れてしまうのではないか。^[150]

これらの記事からわかることは、朝鮮戦争の最中であった1950年を除く毎年8月6日に平和式典と平和宣言を行っている広島でさえ、何十年という歳月が風化させてしまうことだ。風化への懸念が、福島第一原発事故に乗じて「ヒロシマ」を再熱させようとする現象につながったのである。2011年8月3日の朝日新聞の記事「被爆者の証言」にも「世界の目がフクシマに向いている今こそ、その根っこにあるヒロシマ、ナガサキを伝える好機

[146] 朝日新聞データベース聞蔵Ⅱビジュアル, <http://database.asahi.com/library2/main/start.php>, 2013年1月1日付, 最終アクセス日 2016.1.18

[147] 同上, 2011年8月6日付, 最終アクセス日 2016.1.18

[148] 同上, 1988年2月20日付, 最終アクセス日 2016.1.18

[149] 同上, 1989年03月26日付, 最終アクセス日 2016.1.18

[150] 同上, 1989年8月20日付, 最終アクセス日 2016.1.18

だ」^[151]という被爆者の思いが綴られていた。ただ、こういった風化への恐れから、「フクシマ」が「ヒロシマ」の後を追うかたちで表象されることが、新たな問題を起こしかねないのも事実である。

つぎに、「フクシマ」が纏う負のイメージや誤解を払拭する活動を通して、「フクシマ」が福島と別離し、国際的にも正しく認識されれば、「ヒロシマ」のように世界共通語として確立するであろう。そうすれば、福島が「フクシマ」の呪縛から解かれるに違いない。そのためには、広島が平和宣言に「ヒロシマ」を登場させたように、公の場で、正しく、しかも世界に向けて「フクシマ」を伝えることが大切である。

ここで問題なのは「フクシマ」は「ヒロシマ」と違って、原因の発生から早期に拡散されたために、誤った解釈やイメージを払拭できないまま現在に至っていることである。気になる記事が朝日新聞に掲載されていた。「米オハイオ州のタブロイド紙に、キノコ雲が三つ並んだ漫画が掲載された」^[152]という記事である。幸い、「フクシマ」に対してもキノコ雲が描かれたことに対して在デトロイト総領事館が「事故と原爆投下を同一に扱うのは不適切」^[153]と抗議したことから、ネット上の漫画は削除されたが、こうした報告は氷山の一角である。

これ以上誤ったイメージが膨れ上がらないために、「フクシマ」が「ヒロシマ」や「福島」と意味を混同されて使われる現状をいち早く打開する必要があるようにも感じる。そのためには、「フクシマ」を公の場で確立することに加え、誤った「フクシマ」に関しては「福島」あるいは「ふくしま」に戻す取り組みが広がることが望まれる。

そして何より、メディアこそがより慎重に表象の選択をすべきである。1977年8月6日の朝日新聞の記事では、「英語のスピーチが、マイクから流れる。『NO MORE HIROSHIMA』」^[154]とある。外国人が発する言葉はそのままアルファベットで表記している例である。「ノーモア・ヒロシマ」と変換する必要はない。そもそも、カタカナは外国人にはとってはあくまでも日本語であるため、カタカナ変換されたものは世界向けではなく日本国内向けのメッセージにすぎないのではないだろうか。不必要な変換は避けるべきである。

[151] 朝日新聞データベース聞蔵Ⅱビジュアル, <http://database.asahi.com/library2/main/start.php>, 2011年8月3日付, 最終アクセス日 2016.1.18

[152] 同上, 2011年4月8日付, 最終アクセス日 2016.1.18

[153] 同上, 2011年4月8日付, 最終アクセス日 2016.1.18

[154] 同上, 1977年8月6日付, 最終アクセス日 2016.1.18

最後に、ジャーナリズムに重要なことは“報道は音楽や芸術とは違う”ことを念頭に置くことだと考える。音楽の世界はイメージを創造する世界であり、その例として楽曲のタイトルを「オモイダマ」としたアーティストが、そうした理由について「曲の解釈を自由にとの願いをこめカタカナで表記」^[155]と説明した。一方、報道ではそのようなイメージを排除しなければ事実をありのままに正確に伝えることはできない。イメージで共感を呼ぶ音楽とは異なり、報道はカタカナ表記で解釈を広げたり、イメージの捏造に加担したりしてはならないのである。以下にジャーナリストの声を引用する。

十分な根拠を欠いた「危険なフクシマ」像の広がりには県内外を分断し、そこで生きる人の誇りを次の世代にわたって奪いかねない。農業や観光の経済的打撃はもちろん、目に見えない誇りの回復も視野に入れた発信を新知事には求める。私たちメディアの伝え方が重要なことも言うまでもない。(高橋尚之)^[156]

新聞は事実を書くもの。曖昧なものや曖昧な言葉はそぐわない。だからこそ「フクシマ」には違和感がある。実際に今も全住民避難が続いている福島県内の原発事故被災地では、事実で勝負している。カタカナは物語(フィクション)としてのフクシマの捉え方にすぎない。ジャーナリストとしてイメージの世界を利用することはNG。^[157]

本稿で検証を試みた、「ヒロシマ」「フクシマ」というカタカナ表象は、実に様々な背景や解釈を持ちながら、マスメディア、ソーシャルメディアをはじめあらゆる世界、あらゆるシーンで便利に登場している。当然のことながらカタカナで表記されるすべてのものが否定される必要はなく、「ヒロシマ」のように「広島」の同音異義語として確立されていれば、カタカナ表記自体が問題視されることもない。むしろ「ヒバクシャ」や「ツナミ」のように国際語として通用すれば、グローバル社会で端的にメッセージを伝えるツールとして機能するだろう。問題は、カタカナに対する不確かな知識や“カタカナによる表象”への認識不足である。自らも不必要にカタカナ変換することを避けるとともに、報道の中で、カタカナ表記による虚像のイメージが創造されないように、情報の受け手としても賢明に見守る必要がある。

[155] 日本放送協会, E テレ, 『R の法則「ライブ&トーク 関ジャニ∞Part2」』, 2015 年 11 月 18 日放送

[156] 朝日新聞データベース聞蔵Ⅱビジュアル, <http://database.asahi.com/library2/main/start.php>, 2014 年 10 月 17 日付, 最終アクセス日 2016.1.18

[157] インタビュー, 河北新報社寺島英弥, 河北新報解説委員兼記者, 高田牧舎, 2015.11.21

参考文献・引用一覧(項目別)

【書籍】

1. 重松清他共著(2015)『メッセージ&フォトブック No Nukes ヒロシマ ナガサキ フクシマ』講談社
2. 柴田優呼(2015)『“ヒロシマ・ナガサキ”被爆神話を解体する』,作品社
3. 小菅信子(2014)『放射能とナショナリズム』,彩流社
4. 『Journalism 2014 年 2 月号(通巻 285 号)』,朝日新聞出版
5. 関谷直也(2011)『風評被害 そのメカニズムを考える』,光文社
6. W.リップマン著, 掛川トミ子訳(1987)『世論(上)』,岩波書店
7. 河北新報社著(2011)『河北新報のいちばん長い日 震災下の地方紙』,文藝春秋
8. 玄侑宗久(2011)『福島に生きる』,双葉社

【ウェブページ】

1. アマゾン,カテゴリー「本」 <http://www.amazon.co.jp>
2. 広島学院中学校・高等学校ウェブページ「講和」「9月10日朝礼『ヒロシマ』そして『フクシマ』2012/09/10」http://www.hiroshimagakuin.ed.jp/kowa/kowa_201209101
3. 日本原水爆被害者団体協議会 HP, 「国際活動『第二章』」, <http://www.ne.jp/asahi/hidankyo/nihon/seek/seek1-01.html>
4. 読売テレビ HP, 道浦俊彦(2013), 「新・ことば事情 5024「フクシマ」」<http://www.ytv.co.jp/blog/announcers/michiura/2013/03/post-1598.html>
5. 朝日新聞デジタル,コトバンク, <https://kotobank.jp/dictionary/news/>
6. YAHOO!JAPAN 検索画面「福島 農作物」, http://search.yahoo.co.jp/search;_ylt=A7dPhg7OppxWKhoAFLiJBtF7?p=%E7%A6%8F%E5%B3%B6%E3%80%80%E8%BE%B2%E4%BD%9C%E7%89%A9&search.x=1&fr=top_ga1_sa&tid=top_ga1_sa&ei=UTF-8&aq=&oq=&afs=
7. 朝日新聞データベース聞蔵Ⅱビジュアル <http://database.asahi.com/library2/main/start.php>
8. 河北新報データベース <http://neokd.kahoku.co.jp/home.0;jsessionid=96495DF04586AD8BB5C9299661FB2860>
9. 松岡俊二(2015), 「『フクシマ』という表記について」, <http://www.waseda.jp/prj-matsuoka311/material/fukushima20150302.pdf>
10. 広島市ウェブページ「平和宣言」,昭和 44 年(1969 年), <http://www.city.hiroshima.lg.jp/www/contents/1111724897403/index.html>
11. 広島市ウェブページ「平和宣言」,昭和 47 年(1972 年), <http://www.city.hiroshima.lg.jp/www/contents/1111724149106/index.html>
12. 広島市ウェブページ「平和宣言」,昭和 30 年(1955 年), <http://www.city.hiroshima.lg.jp/www/contents/1111724149106/index.html>

g.jp/www/contents/1111737886692/index.html

13. 広島市ウェブページ「平和宣言」,昭和 33 年(1958 年), <http://www.city.hiroshima.lg.jp/www/contents/1111736889599/index.html>

【参考論文】

1. 成田徹男・榊原浩之(2004), 人間文化研究 2, 41-55, 2004-01-10 名古屋市立大学「現代日本語の表記体系と表記戦略: カタカナの使い方の変化」, <http://ci.nii.ac.jp/naid/110004047607>
2. 村中 淑子・黎 婉珊(2013), 国際文化論集 (48), 113-134, 2013-08-30 桃山学院大学, 「中上級日本語教科書における非外来語のカタカナ表記の実態」, 本文中引用箇所一参考文献, 中山恵利子(1998)「非外来語の片仮名表記」『日本語教育』96 日本語教育学会, <http://ci.nii.ac.jp/naid/110009892620>
3. 奥垣内健(2010), 京都大学言語科学論集 = Papers in linguistic science (2010), 16: 79-92「カタカナ表記語の意味についての一考察: 身体性とイメージの観点から」<http://hdl.handle.net/2433/141357>
4. 野宮大志郎(2012) 「ヒロシマ」から「フクシマ」への道: 「ヌークリア(原子なるもの)」の意味変換, 上智大学, 紀要/Departmental Bulletin Paper, 西洋文学ならびに東西文化交流の研究, 59(4), 2012-02-15, http://repository.cc.sophia.ac.jp/dspace/bitstream/123456789/33902/2/200000010063_000480000_82.pdf
5. 安藤裕子(2009), 「ヒロシマ・ナガサキはどのように表象されてきたか—公的記憶の変遷を辿る—」早稲田大学大学院アジア太平洋研究科博士学位論文, <http://hdl.handle.net/2065/34955>
6. 小林宏朗(2013), 日本マス・コミュニケーション学会研究発表論文「新聞で語られた東日本大震災における「フクシマ」と「ふくしま」」, http://mass-ronbun.up.seesaa.net/image/2013fall_C4_Kobayashi.pdf
7. 七沢潔「操作された『記憶の半減期』～フクシマ報道の 4 年間を考察する」サステイナビリティ研 5, 71-89, 2015-03 法政大学サステイナビリティ研究所 http://repo.lib.hosei.ac.jp/bitstream/10114/11406/1/sus5_nanasawa.pdf
8. 矢野摂士(2013), 『政治学研究』第 49 号, 慶應義塾大学法学部政治学科ゼミナール委員会「原爆の記憶をめぐるメディア表象の政治社会学」, <http://www.clb.law.mita.keio.ac.jp/pls-committee/seijigakukenkyl-49/yano.pdf>
9. 高野洋雄(2014), 「気象津波 (meteo-tsunami)」, http://www.metsoc.jp/tenki/pdf/2014/2014_06_0058.pdf

【取材】

1. インタビュー, 日本放送協会鎌田靖, NHK 解説委員兼キャスター, NHK 放送センター 2015.10.14

2. インタビュー,河北新報社寺島英弥,河北新報解説委員兼記者,高田牧舎,2015.11.21

【大学講義】

1. 早稲田大学 2012 年度春期講義「メディアの世界」

【テレビ番組】

1. 日本放送協会, E テレ『R の法則「ライブ&トーク 関ジャニ∞Part2」,2015 年 11 月 18 日放送

付録資料

アマゾン・カテゴリー「本」でキーワード検索した結果—2015.12.10 時点—(重複もキーワード検索結果に従い、そのまま列挙する)

1. キーワード「フクシマ」

『「フクシマ」論 原子カムラはなぜ生まれたのか』2011/6/16 開沼 博

『東京が壊滅する日——フクシマと日本の運命』2015/7/17 広瀬 隆

『フクシマの正義 「日本の変わらなさ」との闘い』2012/9/12 開沼 博

『フクシマ発—文学、ルポ、提言 原発震災の地より紡ぐ一冊』2015/10 フクシマ未来戦略研究所

『核と日本人・ヒロシマ・ゴジラ・フクシマ』(中公新書)2015/1/23 山本 昭宏

『フクシマの真実と内部被曝』2012/11/21 小野 俊一

『ヒロシマ、ナガサキ、フクシマ: 原子力を受け入れた日本』(ちくまプリマー新書)2011/9/5 ランディ, 田口

『裸のフクシマ 原発 30km 圏内で暮らす』2011/10/14 たくき よしみつ

『21 歳が見たフクシマとヒロシマ』2015/8/8 神戸女学院大学石川康宏ゼミナール

『アフター・フクシマ・クロニクル』2014/6/20, 西谷修

『世界史の中のフクシマ—ナガサキから世界へ』(河出ブックス)2011/12/10 陣野 俊史

『につぼんフクシマ原発劇場』2015/4/16 八木澤高明

『メッセージ&フォトブック No Nukes ヒロシマ ナガサキ フクシマ』2015/4/16 「No Nukes ヒロシマ ナガサキ フクシマ」編集部

『原発事故の被害と補償—フクシマと「人間の復興」』2012/2, 大島堅一, 除本理史

『民を殺す国・日本: 足尾鉍毒事件からフクシマへ』(筑摩選書)2015/8/7, 大庭健

『フクシマの後で: 破局・技術・民主主義』2012/11/9 ジャン=リュック・ナンシー、渡名喜 庸哲

『フクシマ発—復興・復旧を考える県民の声と研究者の提言』(Fukushima - hatsu Fh 選書)2014/2, 星亮一, 小山良太

『チェルノブイリ・フクシマ なさけないけどあきらめない』2011/7/7 鎌田 實

『フクシマ・沖縄・四日市—差別と棄民の構造』2013/12, 土井淑平

『脱フクシマ論』(イースト新書)2013/6/3 星亮一

『ヒロシマからフクシマへ 原発をめぐる不思議な旅』2013/6/21 烏賀陽弘道

『福島のおきて フクシマを楽しむための 51 のおきて』2014/10/27 オグマナオト、福島県地位向上委員会

『フクシマのあの日・あの時を語る～石ころの叫び～』2013/3/4 福島県キリスト教連絡会(FCC)

『ヒロシマとフクシマのあいだ—ジェンダーの視点から』2013/3, 加納実紀代

『フクシマと沖縄—「国策の被害者」生み出す構造を問う』2012/4, 前田哲男

『フクシマとチェルノブイリにおける国家責任』—原発事故の国際法的分析 2013/4, 繁田泰宏

『フクシマ2011、沈黙の春』2011/10/6 八木澤高明

『フクシマ原発の失敗—事故対応過程の検証とこれからの安全規制』(早稲田大学ブックレット<「震災後」に考える>)2012/7/31 松岡 俊二

『Message ヒロシマ・ナガサキそしてフクシマからあなたに届けます。』2015/8 広島あおむしグループ、長崎北部ゆりの会

『脱原発、年輪は冴えていま—フクシマ後の原発現地』2012/10 反原発運動全国連絡会

『「3・11 フクシマ」の地から原発のない社会を! 原発公害反対闘争の最前線から』2014/9/8 第2回「原発と人権」全国研究交流集会「脱原発分科会」実行委員会、淡路 剛久

『日米〈核〉同盟——原爆、核の傘、フクシマ』(岩波新書)2014/8/21 太田 昌克

『フクシマ以後 エネルギー・通貨・主権』2011/9/23 関曠野

『原発事故 未完の収支報告書 フクシマ』2015/2/20 烏賀陽 弘道

『フクシマのあとさき—複眼的エネルギー論』(エネルギーフォーラム新書)2015/6/30, 山地憲治

『フクシマで“日本国憲法「前文」”を読む—家族で語ろう憲法のこと』(福島大学ブックレット「21世紀の市民講座」)2014/2, 金井光生

『放射能難民から生活圏再生へ—マーシャルからフクシマへの伝言』2012/12, 中原聖乃

『日本の資本主義とフクシマ—制度の失敗とダイナミック・ケイパビリティ』2012/11/1 谷口 和弘

『土壌汚染—フクシマの放射性物質のゆくえ』(NHK ブックス No.1208)2013/9/25 中西 友子

『1984 フクシマに生まれて』(講談社文庫)2014/2/14 大野 更紗、開沼 博

『第二のフクシマ、日本滅亡』(朝日新書)2012/2/10 広瀬 隆

『反原発の思想史—冷戦からフクシマへ』(筑摩選書)2012/2 スガ 秀実

『戦争と核と詩歌—ヒロシマ・ナガサキ・フクシマそしてヤスクニ』 2015/8, 石川逸子

『少女・十四歳の原爆体験記—ヒロシマからフクシマへ』 2011/12, 橋爪文

『ポスト・フクシマの神学とフォーサイスの贖罪論』 (大森講座)2015/10/20, 川上直哉

『フクシマ カタストロフ 原発汚染と除染の真実』 2014/1/31, 青沼陽一郎

『封印された「放射能」の恐怖 フクシマ事故で何人がガンになるのか』2012/7/25 クリス・バズビー, 飯塚 真紀子

『フクシマは世界を変えたか ---ヨーロッパ脱原発事情』 2012/4/20 片野 優

『アウトローで「フクシマ」 2015/7/15, 吉田雅人

『仮設にて—福島はもはや「フクシマ」になった』 2014/9 藤島 昌治

『共生の法社会学: フクシマ後の〈社会と法〉』 2014/4/28 塩谷 弘康、鈴木 龍也

『フクシマ元年』 2012/3/29 豊田 直巳

『原発大崩壊！ 第2のフクシマは日本中にある』 (ベスト新書)2011/5/14 武田 邦彦

『放射能の中で生きる、母たちへ チェルノブイリからフクシマへ、子どもの命を守る知恵』 2011/9/24 野呂 美加

『被ばく地フクシマに立って—現場から、世界から』 (YOBEL 新書)2015/4, 川上直哉

『農業 6 次化がフクシマを救う』 2013/3/4 大畑太郎

『フクシマ・ノート: 忘れない、災禍の物語』 2013/10/7 ミカエル・フェリエ、義江真木子

『文学者の「核・フクシマ論」—』 吉本隆明・大江健三郎・村上春樹 2013/3, 黒古一夫

『フクシマの王子さま』 2011/12/26 椎根 和、荒井良二

『フクシマからの手紙—3・11 後の日本に生きるすべての人へ』 2011/8, 市川恵子

『カタストロフィーの経済思想—震災・原発・フクシマ』 2014/3 後藤 宣代, 森岡 孝二

『春を待つ里山—原発事故にゆれるフクシマで』 (単行本)2011/12/21 会田法行, 山口明夏

2. キーワード「ヒロシマ フクシマ」

『核と日本人・ヒロシマ・ゴジラ・フクシマ』 (中公新書) 新書 2015/1/23 山本 昭宏

『21 歳が見たフクシマとヒロシマ』 2015/8/8 神戸女学院大学石川康宏ゼミナール

『ヒロシマとフクシマのあいだ—ジェンダーの視点から』 2013/3, 加納実紀代

『ヒロシマ、ナガサキ、フクシマ: 原子力を受け入れた日本』 (ちくまプリマー新書)2011/9/5 ランディ, 田口

『メッセージ&フォトブック No Nukes ヒロシマ ナガサキ フクシマ』 2015/4/16 「No Nukes ヒロシマ ナガサキ フクシマ」編集部

『ヒロシマからフクシマへ 原発をめぐる不思議な旅』 2013/6/21 鳥賀陽弘道

『フクシマ・ゴジラ・ヒロシマ』 2013/3/6 クリストフ・フィアット、平野 暁人

『Message ヒロシマ・ナガサキそしてフクシマからあなたに届けます。』 2015/8 広島あお

むしグループ、長崎北部ゆりの会

『鱗片ーヒロシマとフクシマと』2014/2 堀場 清子

『戦争と核と詩歌ーヒロシマ・ナガサキ・フクシマそしてヤスクニ』2015/8, 石川逸子

『少女・十四歳の原爆体験記ーヒロシマからフクシマへ』2011/12, 橋爪文

『放射能と子ども達ーヒロシマ、チェルノブイリ、セミパラチンスク、そしてフクシマ』(ガリバープロダクツベストヒットシリーズ)2011/12, 碓井静照

『フクシマ/ヒロシマランニングー老俳優の見た東日本大震災被災地』2011/6 前島 幹雄

『ヒロシマ・ナガサキからフクシマへ 「核」時代を考える』2011/11/30 黒古一夫

『ヒロシマが泣いている フクシマが泣いている』ードキュメンタリー映画「ブラックラストワン」拾遺 2015/3/1, 古田博一

『女性情報 2011 年 9 月号一切り抜き情報誌 特集:戦後 66 年ヒロシマ・ナガサキ・フクシマ』2011/9 パド・ウィメンズ・オフィス

3. 「ナガサキ フクシマ」

『ヒロシマ、ナガサキ、フクシマ: 原子力を受け入れた日本』(ちくまプリマー新書)2011/9/5 ランディ, 田口

『メッセージ&フォトブック No Nukes ヒロシマ ナガサキ フクシマ』2015/4/16 「No Nukes ヒロシマ ナガサキ フクシマ」編集部

『世界史の中のフクシマーナガサキから世界へ』(河出ブックス)2011/12/10 陣野 俊史

『戦争と核と詩歌ーヒロシマ・ナガサキ・フクシマそしてヤスクニ』2015/8 逸子, 石川

『Message ヒロシマ・ナガサキそしてフクシマからあなたに届けます。』2015/8 広島あおむしグループ、長崎北部ゆりの会

『ヒロシマ・ナガサキからフクシマへ 「核」時代を考える』2011/11/30 黒古一夫

『女性情報 2011 年 9 月号一切り抜き情報誌 特集:戦後 66 年ヒロシマ・ナガサキ・フクシマ』2011/9 パド・ウィメンズ・オフィス

4. 「ヒロシマ ナガサキ フクシマ」

『ヒロシマ、ナガサキ、フクシマ: 原子力を受け入れた日本』(ちくまプリマー新書)2011/9/5 ランディ, 田口

『メッセージ&フォトブック No Nukes ヒロシマ ナガサキ フクシマ』2015/4/16 「No Nukes ヒロシマ ナガサキ フクシマ」編集部

『戦争と核と詩歌ーヒロシマ・ナガサキ・フクシマそしてヤスクニ』2015/8, 石川逸子

『Message ヒロシマ・ナガサキそしてフクシマからあなたに届けます。』2015/8

広島あおむしグループ、長崎北部ゆりの会

『女性情報 2011 年 9 月号一切り抜き情報誌 特集:戦後 66 年ヒロシマ・ナガサキ・フクシマ』2011/9 パド・ウィメンズ・オフィス

『ヒロシマ・ナガサキからフクシマへ 「核」時代を考える』2011/11/30 黒古一夫